

Modern Visual Culture Creator's Circle

ALCHEMY

あるけみー



現代視覚文化研究会 春会誌

目次

小説

4 犯した罪は
フランカー

7 小説を書こう！
猫にゃん

14 魔法の本
若葉

16 夢見た話
ふるつき

18 The author's fable
みのすけ

24 合縁奇縁の共同制作
小刀

29 掌
ツリウム

イラスト

36 クロード

37 ただれん

38 ぶっちー

39 猫にゃん

40 箱庭氏

41~ メンバー紹介



まえがき

いやぁ、あったかい季節になったものです。ついこの間までコートを着て生活していたのに、そのコートはもうタンスに眠っておられます。

動物たちは暖かい太陽の光の下で活発に活動を始め、新一年生も新しい生活に期待とワクワク感でいっぱいだと思いますが、先輩たちは春休み明けボケでスロースタートを決め込んでおります。

さて、この本を手に取り、丁寧にまえがきも読んでいただいております。

私は現代視覚文化研究会の会長、内田啓太(ちげ)です。部活の名前は長くて言いづらいので、多くの場合、「げんしけん」と略されています。

現視研では様々な創作活動をしている部活です。小説やイラストを書いたり、作曲したり、ゲームを作ったり、兼部もOKでやりたいことが自由にできます。部室ではよくボードゲームとかTRPGとかやってたりしますね。なんやかんや楽しいサークルです。

一応紹介動画もあるので、「奈良高専現視研」でググればヒットするかも？

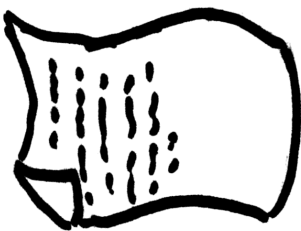
まぁ、つまり創作活動であればなんでもいいわけですね。私は動画とか作ってますね。最近では自作フォントにも手を出してしまいましたし、うーんいそがしいな。

さて、この春会誌「ALCHEMY」ですが、あるけみーって何だろうと思って調べてみたら、「錬金術」という意味だそうです。現視研では、半年に500円の会費を集めています。要するにその会費でなんとかやりくりしているわけですね。はぁ、このタイトルを考えた人のセンスは計り知れませんね。

この会誌は、現視研はどんな部活なのか、どんな雰囲気なのか、どのくらいフリーダムなのか、というのを新入生の皆さんに知ってもらう為に制作しました。このサークルの個性豊かな会員様達のやりたいことが、ぎゅっと詰め込まれたものになっていると思います。他の会員様のすばらしい作品を眺めてセンスを分けてくれないかなと思いつつ、私のまえがきといたします。

ぜひ最後までお読みいただければ幸いです。

小說



作品

犯した罪は

フランカー

俺はいわゆる悪人だった。この世で悪事と呼ばれるものは一通り行ってきた。恐喝、暴行、詐欺、人を刺すのに抵抗が無くなるのも時間はかからなかった。親の愛というものを知らずに育ってきたからなのだろうか。親父は飲んだくれで毎日パチンコに行っていた。俺は負けてイライラしたときのストレス発散の道具としてしか見てられなかった。

母はそんな俺に見向きもせず夜に街にふけこんで行った。浮気していたんだろう、毎夜毎夜親父と言ひ合ひの喧嘩をして最後には憂さ晴らしに俺を殴っていた。

中学を卒業してからは世話になっていた暴走族の先輩の店でバイクの修理をしながら生計を立てていた。ギリギリの生活だったが気の合う仲間達との生活は両親から殴られる生活よりは比べ物にならないほど素晴らしいものだった。

そんな俺にも彼女ができた。族のレディースの女で、気の合ういい女で、そいつに子どもができた、俺はこう言った。

「墮ろせよ」

そんなことはできないと女は言った、快く受け入れてくれるものだと思っていたのだろう。俺は別に愛していなかったけど、子どもは面倒だとかそんなことを思っていたわけじゃない。俺を、子どもを酒瓶で殴るあの親父の血が俺にも流れているのだと思うと生まれてきた子を愛せる自信がなくなってしまう。

言い合いをしているうちに喧嘩に発展した、喧嘩といっても俺が女を一方的に殴るものだったが、子を守ろうとしたのだろうか、顔が腫れ上がったも決して腹を殴らせようとはしなかった。騒ぎを聞きつけた近所の人に通報されてそのまま警察に暴行の現行犯でパクられた。

そのまま留置場にぶち込まれた俺は、やっと事の重大さを理解した。親のようになりたくないという一心で行ったことは、あの親がして来た事と同じことだったのだ。

こんな俺にも罪悪感があったのだろうか、ずっと大人しくしているとそれを見た看守に声をかけられた。

「大人しくしているな、初犯だし執行猶予付きで出られるだろう。もうすこし静かにしていろよ」

「看守さん、俺はいつか人を殺すよ。死刑にしてくれよ、それかずつと刑務所にブチ込んでくれ」

自暴自棄になってこんなこと言った訳じゃない。心の底から思っている。

「そんな訳にも行かない、この国は法治国家だ。重罪も犯してない者を死刑になんか出来ない」

「正気か？ 俺は生まれても居ない赤子を殺そうとしたんだぜ？」

「それはお前の言い分だろう。自白は証拠の一つにしかない」

俺も狂っているが、この国も十分狂っていると思った。

看守が言ったとおり執行猶予付きで出てしまった。もちろん店に戻れるはずも無く、ヤクザの家に転がり込んだ。体のいい鉄砲玉としてしか使われなかったがそれでもよかった。言われたとおりに相手を殴って生きていた。

命を粗末にしている俺でも、自分で死ぬのは怖かったのか。なんども試みたけれども、いずれも直前で止めてしまった。ただ命を落とすよりも、だれかに裁いて欲しかった。

自分をこれ以上社会にのさばらせておく訳にはいかない、この男は裁かれるべきだ、いつもそう考えていた。

だから俺は妙なゲーム機の販売日だかで街に大量の人が繰り出している日を狙って人を大量に切り殺した。「普通」に生きられる彼らに恨みがあったからでも、有名になりたかったからでもない。ただ自分をこの世から葬り去る協力を彼らにしてもらったのだ。

それほどのことをしても俺は死ねなかった。警察が銃を向けてき

たときは喜びすら覚えたが、やつらは俺を撃たずに取り押さえた。国がつけてくれた弁護士が全力であなたを守りますとか言っていたが余計なお世話だった。

「このように、被告人の幼少期はともまともなものとは言えず、彼に刑事責任がありません。よって求刑の死刑は重過ぎるものと言えます。ですよね？」

「そんなことないぜ先生、俺はちゃんと自分で考えて殺したんだ。また外に出れば俺は同じことを繰り返すぜ。ここで死刑にしといてくれよ」

——求刑どおり俺は死刑になった。

それからずっと刑務所で死刑の日を待っているが何年経っても執行されない。

独房でじっとしていると急に気分が悪くなった。視界が揺れ、目が回り、地面も回っているように見えた。

な、なんだ？ まさか俺はここで死ぬのか？ 嫌だ、ちゃんと裁いてくれ、俺は首を吊るされなきゃだめなんだ……。

目覚めると、目の前には、黒いメガネをかけたサラリーマンのよな男がいた。

「こんにちは、どうも死神です」

——は？

「いや間違えて心臓麻痺で死なせてしまいました。ほんとうに申し訳ありません」

——いや、神様に殺されたなら本望だ、さあ早く地獄につれてってくれ、ちゃんと俺を裁いてくれよ。

「そんな訳にはいきません。あなたはまだ死ぬべきではなかった人ですからね。このままだと天国にも地獄にも行けないんですよ。なので！ 特別に生き返らせてあげます！」

——……ふざけるな！ どのみち死ぬだろう！ 早くなくても良

いだろう、戻ったら俺はまた人を殺すぞ！

「だから一からやり直させてあげますよ、大丈夫！ 幸せな家庭に生まれればそんなことしませんって！」

——おい待てよこのクソ野郎！ おい！

——ここは？

おぎやあ

——なんだ？ 俺はどうなったんだ？

おぎやあおぎやあ

「あらあら、起きちゃったわね」

「お母さん！ 私赤ちゃん抱きたい！」

「だめよー、いまはご機嫌斜めみたい」

——なんだこいつら、なんでこんなに大きいんだ。

「どうやら我が家の長男は機嫌が悪いようだ、泣き止んでもらわんとな。ほら高い高い」

——ちよつと待……！

「あ、静かになった、パパ凄い！」

「それ気絶してるんじゃないでしょうね……？」

どうやら、俺はガキに戻ったらしい。回りの変化に驚いていたらもう俺が目覚めたであろう日から五年も立っていた。二度目の両親、そして始めての姉との生活は全てが輝いて見えた。だからこそ俺は怖かった。この温かい家庭を壊してしまうんじゃないかと、それが無性に恐ろしかった。

「カーチャン、俺死にたいんだけど……」

「……ええ!? だ、誰かにいじめられたの?」

「そういうわけじゃないけど……」

想像以上に狼狽されてこつちも困ってしまった。母は会社に行こうとしていた父を引きとめ俺と話をさせた。

「なあ坊や、何があつたんだ? 変な漫画かアニメでもみたのか?」

お前を無くすのはとても悲しいことだ、そんなこといわないでおくれ」

「トーチャン達は俺が死んだら悲しいの?」

「当たり前じゃないか! ……よし、今日は会社を休んで家族サーブスするぞ、遊園地にも行こう。おい! 支度をしろ!」

「えーっ、私も行きたい! 学校休んでもいい?」

「ああもちろん休みなさい、遅れた分は勉強すれば取り返せるのだから」

「あらあら、まあまあ、仕方ない子ね……」

二度目の父は厳しく、それでいて優しい人だった。女の子を泣かせたときは拳で怒られたけれども、謝りにいくときはついて来てくれた。

二度目の母は優しく、ずっと見守ってくれる人だった。大学に行きたいと言っても黙って頷いてくれたし、受験勉強も手伝ってくれた。

初めての姉は俺が泣いていたらすぐに慰めてくれた。姉が結婚したときは父とおなじぐらい男泣きした。

そして、彼女ができた。奇しくも前世での彼女と似ていた。罪を償うつもりで付き合っただけじゃない。真剣に見つめ直して決めた。彼女の両親に挨拶に行ったときは前の人生と今の人生で一番緊張した。

その後、私は保護監察官になった。非行をした少年少女達に寄り添って生きてこうと決め、妻もそれを応援してくれた。心を開いてくれるものも居れば、ずっと開いてくれないものも居た。何人も人が「そんなことをしても無駄だ」と言ってきたが、私は諦めなかつ

た。両親、そして姉が自分より先に旅立ったときは本気で泣いた。

彼が死んだときは数百人もの人々が葬儀に参列した。大企業の社長もいれば、普通の青年もいた。彼らは全員生前の彼に救われたものたちだった。幾人もの人に無駄だと言われたことが決して無駄ではないと照明された瞬間だった。

——そこで彼の二度目の人生のシミュレート結果を映していたモニターが切られた。

「いかがですか? 今なお話題のゲーム機はこの弊社の技術を応用して作られているんですよ、これでこの囚人が精神病理によってあの事件を起こしたわけではないと証明されました」

そう役人に告げる人物は、彼のシミュレート中に出てきた死神と同じ顔をしていた。

「これで十数年に及び長引いた最高裁判決に決着がつけられるわけか……」

「ええ! ぜひこの装置の採用をご検討ください。この囚人以外の精神鑑定にもお役にたてるかと。それではこの囚人を起こしますね」

「いや、死刑の日まで寝かせておいてやってくれ」
装置に手をかけていた男は驚いた顔をした。

「ですが高額な維持費用がかかってしまいますよ?」

「ほぼ死刑になると決まった今、彼がなすべきなのは自分を裁くことだった。それがなされた今、我々にできるのは彼をこのまま『人』として死なせてやることと、彼の来世がこのシミュレート結果以上にいいことを祈るだけだ」

小説を書こう！

猫にやん

小説を書け。

そんなふうに小説を書くことを強制されたとき、作家として、僕はどうすれば良いだろうか。

もちろん、創作活動というものは言うまでもなく人に強制されるべきものではない。のだが、世の中には理不尽というものが往々にして存在する。小説家はその最たる例だろう（小説家に限らず、芸術家全般に言えることではあるが）。なんせ、本来は自身の創作意欲に従って行うべきである創作活動を、お金と引き換えに強制されるのだから。

確かに反例として、小説を書くのが好きで小説を書き結果として報酬を得ている作家が少なくないのも事実ではある。そんなふうに着眼的に創作に励む作家は確かに理想的な作家像であるだろうが、しかし残念なことに僕はそんな理想から程遠い作家だ。

お金が欲しいがために、名声が欲しいがために、小説という手段を僕は用いている。書きたくて小説を書いていた頃の気持ちなんてとつくに忘れてしまった。

……話を戻そう。

何が言いたいかというと、本来は自身の欲求に基づいて行われるべきである創作活動を強制されるといふシチュエーションはこの現代社会において珍しくもないということだ。

しかしとは言え、僕の置かれていふこのシチュエーションはやはり少しばかり珍しいものだろう。

僕は今、小説を書くことを強制されていた。

それも、僕の命と引き換えに。

……さて、小説としてはたしかにこの言い回しで正しいのだろうが、なんせこれは作り話ではなく現実なので、そろそろいい加減に自分

の置かれている状況を整理してみなくてはならない。回りくどい言い方をするのは小説家の性だけれども、そろそろ真面目に、端的に状況を整理してみなければならぬ。

……突然拉致されて監禁され「命が惜しければ小説を書け」と小説を書くことを強制されている。

うん。

実に端的かつ深刻なわかりやすい現状だった。

「小説のアイデア、湧きましたか？」

現状を整理し終わった僕は、優しい声でそう話しかけられる。声の主は僕より一つ二つ年下に見える清楚な女性だった。

そして、虚ろな目をした彼女こそがこの現状を作った犯人だった。

「いやあ……ぼちぼちな……」

後ろ手に縛られたまま、僕は当たり障りのないようそう答える。

こんな状況で話のアイデアが湧いたらそいつは絶対まともな人間じゃねえよ。人を本にしたりするスタンド使いだよ。と思ったが、それを口にする勇氣は僕にはない。

人を拉致するようなやばい人間に対して、そんな挑発的な態度を取れようはずもなかった。

「そうですか……。どうすれば、良いアイデアが湧きますか？ どうすれば、小説を書いて頂けますか？」

彼女はそれに続けて言う。

「私としても、小説を書けなければ先生を殺すというのはあくまで脅し文句でして、なるべくは穏便に、先生に小説を書いて頂きたいのですが」

なるべくは、という何気ない一言は、それでもこの状況で僕を恐怖させるのに十分な威力を伴っていた。しかし、当たり障りないことを言い続けていても進展はない。

「とりあえず、この拘束を外して欲しいかな」

とりあえず素直な要望をぶつけてみる。

「……拘束を解くことは、なるべくはしたくないのですが、まあ、

いくら先生と言えど足で小説は書けないでしょうし、外しましょうか」

彼女は意外にもあっさりとその申し出を受け入れた。すたすたと僕の後ろに回って屈みこみ、僕の手首を縛る結束バンドを左手に持ったハサミで乱雑に切断する。

「……ありがとう」

縛ったのがこの女である時点で礼をいう必要は一切ないのだが、とりあえず僕はそう言った。

「さて、これで先生は両手が自由になりましたから、私より年上の男性である先生はもしかすると私を力づくで殴り倒し、この部屋から、そしてこの家から脱出しようと試みるかも知れませんが」

彼女は僕の顔とその右手に持った包丁を交互に見比べて言う。

「それはとても困るのでやめてください」

「……はい」

もはや抵抗する気もなかった。

「要望通り拘束を外しましたし、これで先生は、私の読みたい小説を書いてくれると思います」

申し訳程度に拘束を外されたところで小説を書こうという気になどならないのだが、そんなことを彼女は意に介してないだろう。

そんな一般的なことを気にする人間が拉致監禁などするはずないのだ。

僕がそこまで考えたところで。

「しかしながら、私は社会人ですので、仕事があります。午後七時に帰宅するつもりですので、それまで、ゆっくり執筆なさってください」

おもむろに彼女はそう言った。

驚くべきことに、人を拉致監禁するような常識のない人間でも雇ってくれるところはあるようだった。日本の雇用情勢もまだまだ捨てたものではないのかもしれない。

「では」

彼女は僕を置いてこの部屋から出ていこうとする。いや、拉致監禁ってこんなあっさりしてたっけ。仕事行ってくるからおとなしくしてね、って拉致監禁でも何でもないだろ。託児所かよ。

「ちよ、ちよっと待てよ」

「なんですか？」

いくらでも心当たりはあるはずなのだが、彼女は、何か咎められるようなことでもしただろうか、とでも言いたげなとほけた顔で、何でもないようにそう言った。

「……なんで君は、こんなことするんだ？」

そんな彼女に対して僕はそう尋ねた。

犯人の動機。それを知ることこそが、事件の真相を、というより彼女を知るための最も効率的な手段だと思っただからだ。

そして彼女は、偽ることなく、素直に僕の質問に答えた。

「決まってるじゃないですか。先生のファンだからです」

部屋の扉が開き、閉まった。

もう、彼女はこの部屋にいなかった。

なるほど。

一言で、彼女は全てを語った。至極シンプルで、どうしようもない理由だった。

「……どうすりやいいんだよ……これ……」

最悪の場合として、脱出しようとする試みが失敗し小説を書かざるを得なくなったとき、どんな小説を書けば彼女は僕をここから出してくれるのか。それを知りたいという意図もあつての質問だったのだが、帰ってきた答えはなんのヒントにもならなかった。

僕の浅はかな試みが華麗に失敗したあたりで、僕はもうすでに投げ出したくなっていた。

「とは言え、やるだけやらないとな……」

立ち上がり部屋を見回す。女性らしいというよりは女の子っぽい部屋だ。窓は全部シャッターが閉まっている。試しに窓を開けようとすると、ぴくりとも動かなかつた。窓枠を注意深く見てみると、

なるほど接着剤で固定されているようだ。

「接着剤なんて開発したの誰だよ……」

そうぼやきながら扉の方へ近づいてみる。

一応、扉に耳をくつつけて聞き耳を立ててみた。近くには彼女はいないらしい。

ドアノブをひねってみる。

がちがちと音を立てるが、ドアノブはひねることが出来なかった。こちらは外から鍵がかかっているらしかった。

「まあ、これで開いたらヌルゲーだよな」

そもそもゲームではないのだけれど、その上ぬるくもなかった。

「はい詰んだ」

脱出できない。

すなわち詰みである。

壁に穴でも空いていれば楽なのだけど、そんなわけもない。

詰んだ。

「小説を書くしかないのか……」

小説を書くしかない。小説家が小説を書くことは普通なように思えるかもしれないが、しかし僕という小説家にとって、その事実は実質上の死刑宣告であった。

さつきから小説家のように振舞っている僕だが、実はここ一、二年、重大なスランプに苛まれている。

というか、まともに小説を書けていない。

最近はずいぶん印税も底が見え始め、バイトをして食いつないでいる。

つまり僕に小説は書けない。

詰んでいるのだ。

「人生終わったな……」

彼女の包丁に刺されて死ぬのだろうか。なるべく痛いのは嫌なのだが。

全てを投げだして、僕は部屋の床に寝そべった。

時計を見ると午前十一時半。彼女が帰ってくるのは午後七時らしいし、それまで寝てしまおうか。

「……ん？」

そのとき、僕は部屋に置いてあったベッドの下にあるものを見た。

「ノート、か……？」

手を伸ばし、それを手に取る。

ピンク色のファンシーなそのノートには、日記帳と書かれていた。

彼女の、だよな？

僕は何気なく、ページを開く。

詰んだなどのたまうわりに優柔不断な僕はまだ、彼女の過去を知ることで彼女好みの小説を書いて逃がしてもらおう、という期待を捨てきっていなかったし、少なからず希望をこめて日記帳のページをめくった。

ぱらぱらとページをめくり、ゆっくり読み進めていく。

それはそれは吐き気を催すような、生理的な嫌悪と怒りのこみ上げる内容だった。彼女がなぜ人を拉致監禁するような人間になってしまったのかを否が応でも理解させられる内容だった。はっきり言って読みたくなかった。こんな内容だと知っていたなら、読むことは愚か、手に取ることも確実にしなかった。

それほどまでにおぞましい内容だった。

日記帳には、一人の幼い少女が、おおよそ実の親から受けていいものではない扱いを受けている様子が、生々しく記されていた。

「……………！」

殴る蹴るはあたりまえ。精神的にも肉体的にも、人間を、一人の少女を壊すのに充分すぎる虐待の数々が、記されている。

半分ほどのページをめくった頃には、彼女の虚ろな目の意味がわかった気がした。

次のページにもこんなことが書かれているのか。ページをめくる手が止まりそうになった。

しかし、僕はなぜか、何かに導かれるように、ページをめくった。ページをめぐることをやめなかった。

次のページを見て、驚いた。

そのページには、今までのページとは違ったことが書かれていたから。

「……これは」

そこには、日記帳の中で初めて、前向きな内容が書かれていた。

本を読むことすら虐待を受ける理由になる少女が、偶然、携帯電話で閲覧出来る小説投稿サイトの存在を知った日の喜び。それが数ページに渡って記されていた。

そして、とても自分好みの小説を見つけたことも記されていた。

その小説の中で両親に虐げられていた少女と、自身の境遇を重ねているようだった。

いや、それよりも驚いたのは。

「……この小説、僕が書いたやつだ……!」

少女が見つけた自分好みの小説とは、僕が投稿していた小説だった。

高校生の僕が書いた妄想そのままの稚拙で恥ずかしい文書が脳内に蘇る。

ベッドに飛び込んで足をばたばたさせた衝動に駆られそうになる。

しかし、その衝動をぐっとこらえ、更にページをめぐる。

次のページから、日記帳は日記ではなくなっていた。

その小説の感想が、少女らしい可愛らしい文字で、長々と記されていた。

「……………」

胸の奥から何かがこみ上げてくるのを抑えられず、僕は静かに泣いた。

当時、まだ自分書きたくて小説を書いていた頃のことを思い出して。

小説を書きたくて書きたくて仕方がなかったことを。賞賛のコメントや誹謗中傷のコメントに一喜一憂したことを。出版社から書籍化のお誘いが来たときの喜びを。思い出して。

「……………」

思えば、僕はいつから小説が書けなくなっただろう。

答えはすぐに出た。

小説家になった時からだ。

僕は、小説家は小説を書けばいいのだと思っていた。小説を書くのが好きだから、小説家になりたかった。

けど、小説家はそんな職業じゃなかった。

小説を書けばいいわけじゃなくて、小説を書くこと以外をしてはいけなかった。それくらいに厳しかった。

何より、自分の好きな小説を書いてはいけなくなった。アマチュアじゃなくてプロになったのだから、僕は自分の好きな小説ではなく、読者の好きな小説を書かなくちゃいけなくなった。それを強制されるようになって、僕は小説が書けなくなった。

自分の書きたくないものを書きたくなくて、小説を書くことを拒絶するようになった。

そして、自分の書きたいものもわからなくなった。

そうして小説を書けなくなって、もうそろそろ二年になる。

もう遅いかもしれないけれど、手遅れなのかもしれないけれど、僕は今この日記帳を読んでやっと、書きたいものを取り戻せたような気がした。

それくらい、僕は小説を書きたいと、今思っている。

当たり前のことだけれど、やっぱり小説家のモチベーションを一番上げてくれるのは、読者の素直な意見だということか。

「……書いてみるか……」

結局小説の感想になってしまっていた日記を閉じ、元の場所にに戻しておく。

さて、彼女は小説を書けと言っていたのだし、原稿用紙くらい用

意してくれているはずだ。まず原稿用紙と筆記用具を見つけるところから始めないといけない。とは言え、その程度大した手間ではないだろう。

なんせ、書きたいものはもう見つけたのだから。
午後七時。

再び部屋に帰ってきた彼女に、僕は無言で原稿用紙の束を突き付けた。当然ただの紙束ではなく、僕の書いた小説である。

僕はその後、部屋にあった机の引き出しから原稿用紙と筆記用具を見つけた。そしてそのままその机に向かって、執筆活動に勤しんだ。

まともに机に向かうことが久しぶりで新鮮で、自分のブランクの長さを思い知らされたが、それでも書きたいものを書くのは楽しかった。

そんなふうに来上がった小説を突きつけられて、彼女は少し驚いたような素振りを見せたが、すぐに受け取り、何も言わずそれを読み始める。

黙って書く、黙って読む。やっぱり小説家と読者の関係はこうでなくちやいけない。交わす言葉は全部、文章に変わったのだ。

彼女はただ静かに、僕の小説を読み続けた。

時折彼女はぼろぼろと涙をこぼす。まるで日記帳を読んでいた時の僕のように。

そうして彼女は、十ページほどの短い小説を、読み終えた。

「さて、それで、僕はここから出してもらえるのかな」

僕は彼女を見つめてそう言う。彼女は涙をこらえながら原稿用紙を大切そうに抱え、何度も何度も頷いた。

「……ご迷惑、おかけしました……」

涙をぬぐいながらそう言って、彼女は部屋の扉を開ける。

そのまま部屋から出た僕だったけれど、振り返って、彼女に話しかける。僕には一つだけ、彼女に聞きたいことがあった。

「せつかくだし、教えてほしいんだけど」

「……ふえ？」

真つ赤な顔をした彼女は、こちらを振り返ってそんな可愛らしい声をもらった。

「いや、ほら……その、感想だよ。……小説の」

小説の感想を人に聞くのはただでさえ恥ずかしい。少しだけ可愛らしい彼女のそんな仕草を見せられた直後だと、気恥ずかしさは5割増しだった。だから、僕は彼女と目を合わさずそう言った。

「……とても、とても感動しました……！本当に……ありがとう……ございました……！」

彼女は優しく微笑んで、そう言ってくれた。それを聞いて……聞きたかった言葉を聞いて、にやつとほくそ笑んで僕は言う。

「『次回作でお会いしましょう』」

その言葉は、僕がさっき書いた小説の本文の、一番最後のさらにその後にかくれている言葉で、とても陳腐な、小説家らしい別れの言葉だった。

小説家と読者の会話は、これで十分だろう。



「あのさあ……」

それからひと月ほど過ぎた頃、僕は無気力な呆れたような声でそう言った。

まあ、とりあえず僕の現状を説明しよう。

……突然拉致されて監禁され「命が惜しければ小説を書け」と小説を書くことを強制されている。

うん。

実に端的かつ深刻で、とてつもなく既視感のある現状だった。おまけに僕を拉致したこの目の前の女も見覚えがあった。

「えつと、とりあえずこの結束バンド外してくれないかな………ちよつとぶん殴りたい」

「ぶん殴るだなんて暴力的なことはいけません。先生の手は女性を殴る為ではなくて、小説を書くためにあるのです」

「いや、あんたの手も小説家を拉致するためにあるんじゃないと思っぞ……」

僕はつきり彼女の件はこの前ので解決したと思ってたんだが……。

「ふふふ……いやー。それがですね。案外実は私のこの両手は、先生を拉致するためにあるんですよ」

「はあ……? どういう……」

そこまで言っつて、絶句した。

彼女が、ポケットから取り出したあるものを、僕に見せたから。

「それは……!」

彼女が僕に見せたのは、名刺だった。彼女の顔写真が印刷されているが、重要なのはそこではなく。

「あんた、編集者だったのか?」

僕は叫んだ。

名刺によると、彼女はきちんとした出版社に勤める編集者らしい。

「そうですよ?」

何を今更というふうに彼女は答える。

「言っただじやないですか、私は社会人なので、仕事があるのです、と」

「そんなのが伏線だと思わねえだろ!」

何なんだこの展開!

そして、オチが読めたぞ!?

僕は今最高に嫌な予感がしている!

「賢明な先生のことですから、お察しだと思えますけど、私、先生の担当編集になっちゃいました!」

「やっばりか!」

なんとなくわかってたよ!

僕の小説を書籍化してくれた出版社だったもんな! あんたの名

刺に書いてあったの!

「まあまあ、嬉しいのは私も同じですがそうはしやがずに」

彼女は満面の笑みでそう言う。

「僕が嬉しくてはしやいできるように見えるなら眼科へ行け! いや、精神科へ行け!」

「そう照れなくてもいいじゃないですか……。先生あのとき、『次回でお会いしましょう』って、言ってくれたじゃないですか。それってまた会おうってことでしょうか?それに、あの小説の内容……。それってもうそういう意味ですよね……。?」

彼女は座っている僕の後ろから抱きつくようにして僕の耳元に口を近づけ、そう囁く。

『あの小説の内容』。そこを特に強調して。

あの時僕が書いたのは、小説が大好きな少女が大好きな小説家に出会って幸せになる、そんな前向きで明るい話で、当然彼女と僕をモチーフにしたものだった。

確かにその時は気にしていなかったが、今から思うと、僕達をモチーフにしたその小説は告白に近い内容だったような気がする。

……なんて恥ずかしい小説を書いているんだ僕は! しかもそれを当の本人である彼女に渡すとか、思いつきり黒歴史だよ!

彼女の執拗なボディタッチもあつて、自分でわかるレベルで体温が上がっている。多分顔も真っ赤になつてはるはずだ。

僕は必死で抵抗しながら叫ぶ。

「そういう意味がどういう意味なのか全くわかんねえけどあんたの顔を見ればわかる! 絶対そういう意味じゃねえ!」

「あらあら、先生つたら。照れなくてもいいのに……。それに、そんなに暴れないでください。私がつきつきりで執筆のサポートをしてあげようというのに、一体何が不満なんですか」

「あんたがつきつきりなの不満なんだよ!」

……。オチから言えばその口論は、今回の拉致監禁は彼女ではなく出版社の差金であることを告げられた僕が抵抗を諦めるまで続いた。

まあ、つまり要するに今回の騒動の総まとめをすると、ひと月前に拉致監禁され小説を書かされた事件は僕のブランクを埋めるためのほんのリハビリのようなものだったということなのだろう。彼女にそんな気はなかっただろうし僕もそう思っただけはなかったからこれは結果論だが、いいリハビリになったのは事実だ。なんせこれから再び小説家として復帰しようとするれば、小説を書くことを強制されることなんて日常茶飯事になるのだから。

全く、創作活動を強制されるなんて、つくづく世の中というのは理不尽なもので、小説家というのは因果なものだ。

これから、僕はちゃんと小説家としてやっていけるのだろうか。そう自分に問いかけてみたが、それは僕にもわからないことだった。

こんな先行き不安な物語だけれど、それでもとりあえずこの場を小説家らしく締めくくるとすれば、それは『次回作でお会いしましょう』ではなく、『つづく』、で結ぶのが正しいだろう。

だって、僕と彼女の物語はまだ始まったばかりなのだから。僕達の物語は、まだまだ、『つづく』。

了

魔法の本

若葉

学校の七不思議。

トイレの花子さんや理科室の動く人体模型などがメジャーなものだが、私の学校の七不思議は一風変わったものばかりである。その内の一つが、「どんな質問にも答えてくれる魔法の本」というものだ。

この学校の図書室は町でも有数の蔵書数を誇るので、一般の人達も利用可能になっている。なので夏休み期間でも開いているのだ。私は、その七不思議の真偽を確かめる為に図書室へとやって来た。「とは言え、そう簡単には見つからないわよね……」

私の学校の図書室は、図書館と言っても過言ではないほど広い。というか、本館から少し離れた場所にある建物丸々が図書室なので、もはや図書館である。余談だが、町のパンフレットでは図書館と紹介されている。

とにかく私は、特に質問したいことがあるわけではないが、「どんな質問にも答えてくれる魔法の本」を探すために図書室の中へ入っていた。

「うーん、やっぱり見つからないか……」

一日で見つけられるとは思っていなかったが、それでも気が滅入っってしまう。何せ朝の九時から夕方の六時まで搜索して、ようやく図書室の一階を一通り見終わっただけである。三階まで探すのに単純計算で三日かかってしまう上に、本の詳細を知らないのでもうしても慎重に探さなくてはならなくなる。

「閉館時間まで、後三十分です」

そんなアナウンスが聞こえたかと思うと、帰らなければと思ってし

まうことで有名なあの音楽が流れてきた。私はため息をつき、しぶしぶ図書室を後にした。

次の日。

私は二階を搜索した。二階は参考書などしか置いてないので探す必要はないのだが、念のため探してみた。当然だが見つからなかった。

三日目も同様に三階を探したが、見つからなかった。

四日目。

私は図書室の一階に置いてあるパソコンを使うことにした。このパソコンは図書室内にある全ての本のデータが入っており、タイトルを検索すれば本の概要まで知ることができる優れたものだ。私は丸一日かけて魔法関連の本を調べ尽くしたが、特に目ぼしい情報は出てこなかった。

その後、私はさらに三日をかけて一階から三階を搜索したが大した情報は得られず、「そろそろ止めようかな……」と思い始め、今日見つからなかったら諦めようと思っていたときである。前述の通り、この学校の図書室は本館とは別の場所であり、そしてやたらと大きい。なので放課後、学校の見回りの人とは別で図書室の見回りの人がいる。私は偶然、その二人の警備員のこんな会話を聞いた。

「ここ最近ずっと起きてることなんだが、見回りをしてるときにな、何故か一階のパソコンが一つだけ点いているんだよ」

「ただの電源の切り忘れじゃないか？」

「あのパソコンの電源は一斉に切れるからそれはないと思うんだが……」

「それで、どうしたんだ？」

「もちろん電源を切ったよ。でも、毎日そんな感じだから、ちょっと不気味なんだよな……」

「不思議なこともあるもんだな」

それを聞いて私は、藁にもすがする気持ちでそのパソコンを確かめることにした。最近はその治安が良くなっているので、警備が少し

緩くなっていると思う。この町は閉鎖的な傾向があるため、警備会社の警備がない。この上なく侵入しやすく思えた。

閉館時間が過ぎた。

図書室の警備について調べると、入口のセキュリティは思いの外しっかりとしていたので、私は侵入するのを諦め、閉館時間を過ぎても帰らず一階に潜むという方法をとった。警備の人は懐中電灯を使っているので大体のルートはわかるし、床は音が響きにくい材質で出来ていたので忍ぶのは簡単だった。私は警備の人が二階に上がったのを確認し、パソコンを見に行った。

「見つけた」

私は電源が付いている一台のパソコンを見つけた。画面には、私が四日目に利用した、この図書室に収められている本を検索するためのサイトが表示されている。

「どんな質問にも答えてくれる魔法の本ってまさか、この検索サイト？」

確かに何を聞いても答えてはくれるが、何か違う気がする。

「何で電源が点いているのかわからないけど、長居するのは危ないし……仕方ないか」

私は警備の人が戻ってくる前に窓の鍵を開けて外に出て、そのまま家に帰っていった。パソコンの後ろに置いてあるテーブルに、「ちがうよ」と書かれた黒い本があることに気づかず……

次の日。

これつきりと決めていた魔法の本探しを止めて、私は普通に本を借りに来た。その時に警備の人達が、

「昨日点検したときに例のパソコンが、初めは点いてなかったのに帰りに確認してみたら点いていたんだよ。念のために周辺に怪しい

ものはないか確認してみると、近くの窓に鍵が掛かってなかったんだ。だから、侵入した誰かが電源を点けたんだと思う」

「わざわざパソコンを使うために侵入するか？」

「わからん」

「どうか、しっかりと警備しろよ」

「それな」

と言っていたのを聞いて、私は心の中で謝罪しておいた。

夢見た話

ふるつき

夢のなかで、僕はぐっすり眠る小学生だった。

明るい太陽の光がカーテンをすり抜けて僕のまぶたをくすぐった。今日もいい朝だ。お母さんの作ったお味噌汁の匂いが鼻腔をくすぐる。僕の心を癒やしてくれるいつもの匂い。お腹がぐうと鳴いて、僕はじっとしていられなくなって、布団をはねのけて自分の部屋を飛び出た。

「行つてきます。」

「はい、気をつけてね。今日は特に。」

優しく微笑みながら手を振るお母さんを背に、僕は別れを惜しむこともなく玄関から飛び出した。この時、僕が少しの落ち着きでも持っていれば、きっと無事では済まなかった。

視界の端を、黒くて丸い何かが目にも留まらぬ速さで動いた、と思つた次の瞬間には、

——ガシャーン

と、嫌な音が派手に響き渡った。

振り向けば、植木鉢が割れて粉々になっていた。柔らかい土が飛び散つて、紫色のパンジーが横たわっている。上を向けばベランダがあって、背の高いつる植物が、欄干を罵つて伸びているのが見える。このパンジーもベランダの一隅を華やかせていたはずだ。

「お、おかあさん！」

僕は叫びながら、割れた植木鉢を飛び越えて、玄関に駆け戻り、扉を乱暴に開けた。

「パンジーが落ちてきたんだけど！ 植木鉢割れるし！」

玄関にまだお母さんの姿を見つけて、僕は必死に訴えた。心臓が激しく脈打っていたし、汗がどつと吹き出していた。きつと、お母さ

んを見て、安心して緊張が緩んだんだと思う。僕は運が良かっただけで、死んでいたかもしれないだつてことがわかつていた。

母は慰めてくれるとおもいきや、

「だから、気をつけてねって言ったでしょ。パンジーは片付けておくから、行つて来なさい」

「え!? あ、うん。行つてきますっ」

僕は戸惑いながら答えて、慎重に玄関を出た。上から何か落ちてこないか、植木鉢の破片を踏んづけないか。

少し歩いて、でもまだ家が見えるだけの距離というのに、僕は既に汗びっしりだった。さっきの嫌な汗もそうだけど、今日は異様なほどに暑い。まだまだ夏本番というには早い時季だと思っただけ、太陽はぎらぎらと照りつけて僕の肌を焼いていた。右手には小さな池があるけれど、一抹の涼しさすら感じることはできなかった。

「暑い……」

つい、そう漏らした時につばが飛んで、アスファルトに触れるか触れないかのところで、しゅんつと音を立てて消えた。

「えっ」

僕は一瞬間固まった。今のは……蒸発だろうか。気がつけば、僕の指先や顎から垂れる汗も、地面にたどり着くことなく消えていた。

「なにが……」

僕は思わず一步下がろうとして、足が動かないことに気がついた。「！」

靴の底のゴムが溶けてしまつて、べつたりと地面に接着されてしまつていた。僕はバランスを崩しかけていたけれど、もしこのまま転んでアスファルトに手をついたりしたら……考えるだけでぞつとずる。

しかしいまの僕には考える時間もぞつとする時間も惜しかった。僕は自分でも驚くほど綺麗に靴から足を抜いて、靴を踏んづけてジャ

ンブした。大きく右に飛んで、池に飛び込もうとした。けれど、柵が邪魔で、僕は右手でそれを掴んで、自分の体を持ち上げた。

じゅうつと音がした。右掌が焼ける。

ぼつと手を離して次の瞬間にはもう僕は水面に叩きつけられていた。泡が視界を覆った。僕はランドセルを脱ぎ捨てて、水面に出て大きく息をした。

大火傷を負ってしまった右手を冷やそうとしたけれど、池はぬるくてお風呂みたいだった。底の方ならまだ冷たいかもしれないと思って、息を吸って僕は池に潜って――

不思議なものを見た。それは、僕の姿だった。池の底から僕を見つめ返している僕がいた。

何が起こっているのかわからないけれど、僕はとにかくそこを指して潜っていった、もう一人の僕も、おなじように浮かんでできた。

僕は手を伸ばした。もう一人の僕も手を伸ばした。そして僕たちは互いに触れ合わなかった。するりと手はすり抜けた。そして、僕は急に体を押し上げられる感覚を受けて、池の底にぐんぐん進んでいった。そして湖面に到達した。

「ぶはあつ。はあ……はあ……」

荒い呼吸をした。それから、周りの景色が明らかに変だということに気がついた。

「これは……」

空には満ち欠けする月が「つ浮かんでいたし、僕は自分の家のお風呂に浸かっていた。家の壁や屋根はすべて透明なガラスで、彫像になっっているお母さんが見えた。

家の外には、なんだかよくわからない、幾何学的だったり非幾何学的だったり、カラフルだったり白黒だったりする何か飛んだり跳ねたり浮いたり沈んだりしていた。

僕はその光景をひどく現実から乖離した、なにか芸術めいたもの

と感じた。すべての景色は一定を保たずいつでも変幻自在に変わり続けていた。

それは僕のキャパシティを無限に超越していて、

「あー、芸術だ……」

僕は気を失った。

僕はびつしりと汗をかいて、うなされながら目をさます事になる。

The author's fable

みのすけ

ある住宅街の中心に位置する、小さな児童公園。どこからか、野良猫たちが現れることがよくあるこの公園は、町の人々に「猫公園」と呼ばれている。

そんな公園で、平日の昼間なのだが、齋藤は猫に餌を与えていた。齋藤は二十歳を過ぎた立派な社会人である。一般常識に則って考えるならばそのような人間は、働いていない、という印象を抱かれるのだが、普段、齋藤はそんな視線を気にも留めず、猫に餌を与えてはなでなでしていた。

誤解のないように、彼の素性について説明すると、彼は童話作家なのである。一か月に二、三話書き溜めて、話がまとまったら編集者と相談し、本にする、といった仕事をしているため、平日にもかかわらずこんな場所に来ることもできる。

「よしよしよし」

こんな風になでている時こそが、彼の至福の時である。

今日も様々な猫が齋藤の周りに集まるが、特に黒い一匹が最近仲間に加わったようで、餌をもらうメンバーにその顔を連ねていた。

こんな風に参加が増えることは稀なので、齋藤は密かに喜んでいて、彼らに話しかける程度には、テンションが上がっている。

「嫁さんがいなくなっちゃってさー、あんまり帰ってこないものだから、最近家事にも慣れちゃったよ……お前らが探すの手伝ってくれたらいいんだけどなあ……」

話は一週間ほど前に遡るが、齋藤の妻は大規模な家出をした。大人にもなつて家出とは、などと齋藤は呆れたが、そんなことお構いなしに絶賛行方不明中で、警察に届け出たものの、家出のメッセーヂがあつたため取り合ってもらえなかった。齋藤としては、浮気しているんじゃないか、だとか、親に決められた結婚が不満だったん

じやないか、という不安や疑いを抱いているが、かといって何かできるわけでもない。何より心配なのは、最近テロが起きているため、街が物騒なことと、連絡もつかないことである。

つまり、先ほどの発言はそのような心情から零れたもので、ただの独り言のような意味のない言葉なのだが、しかし、それを聞く者はいた。

「なんと！ 細君が行方不明？」

齋藤が言い終わるか終わらないか、そんな時、とても感情的な声が聞こえた。それは芝居がかった調子の、少々時代錯誤の気がある声音で、齋藤は変な声だと思ったが、すぐに最もおかしいことに気が付いた。

「この猫喋った……？」

齋藤は例の黒猫に対して訝しげな視線を送ると、その黒猫はじつとこちらを見ていたので、見つめあうような形になる。対峙するその目からは、人間らしい、それでいて知性を感じられる

「申し遅れた。吾輩……そうだな、シーマと申す一介の猫だ。ここ一月ほど、吾輩の空腹を満たしてもらった恩から、其方の力になるうと前々から思っていたのだ」

縞模様なわけでもないのにシーマか、と齋藤は心の中で呟く。

「……確かこの前財布落とした時、お前に言ったのに何にもなかったよな……」

「それは其方が勘違いしていたからであろう。上着のポケットの中に入っていたぞ」

「むむ……」

事実そうだったのだ。落胆しつつ家に帰り、コートを探ると財布は傷一つなく、そこにあつたのでとても安堵したものである。つまりこの猫の言っていることは、喋っているという現象を除けば本当なのだ。

「そうなのだ。そうなのだよ」

落ち着いた様子で、シーマと名乗る黒猫は囁いた。辺りには誰の

人影も見えず、この猫の存在は幻なのか、それとも現実なのか判断する術はない。静けさは落ち着かせる作用よりも、不安になるそれの方が大きな割合を占めていた。斎藤は段々と混乱してきて、足を付けているはずの地面がうつすらと消えていくような感覚に襲われる。

「あれ……？ 斎藤さんですか？」

斎藤が頭を押さえて考えていると、温かみのある優しい声、言い換えるなら騙されやすそうな純真さを持った声が、斎藤の耳に流れ込んだ。この不可解な状況の中、そんな問いかけでさえも斎藤には救いと思われた。やっぱり人がいる、この猫が喋っているのかどうか判断するきっかけになるはずだ、などと、斎藤が考えたのは至極当たり前のもので、その糸がクモの糸だと知らずにするものもまた当然のことだった。

斎藤が振り向くと、そこにいたのはかなり奇抜な色の髪を持つ、コート姿の少女であった。暖かそうなニット帽を被っていて、どこか悠然とした雰囲気のある女性だ。

「わ……わくしゅんっ」

風邪だろうか、不思議なくしやみをすると、彼女はこちらに近づいてきて、黒猫を意外そうに見た。

「やあ、クー。良いところに来た。斎藤殿の細君探し、始めるぞ」

シーマは少女をなんら意外そうでもない様子で、クーと呼びかけた。まるで前々から知り合いだったかのように。この場で自分だけが親しくない、相手のことを知らないのだ。

「……………」

斎藤は魂が抜けたような、抜けないような、煮え切らない表情である。今まであやふやだったものが、一瞬で自分の思いもよらない方向へとひっくり返って、自分だけ弾き出されてしまったような、そんな気分を抱える。

「どうしたんですか、そんな顔して。私たち、手伝うんですよ。恩があるんですから、あたりまえ、ですよ？」

「ちよつと待ってくれ。君は何者だ？ その黒猫を知っているのか？ で、なんで君も手伝う？」

斎藤は当たり前の質問から、掘り下げた質問まで、現れた人間らしい少女に問う。しかし同時に直感がこれは何かが間違っている、と警鐘を鳴らしていた。しかし、少女ではなく、シーマが矢継ぎ早に答える。

「彼女はクーリリという。吾輩の知り合いだ。そして、彼女は其方に恩があるのだよ」

先ほどまで饒舌だったシーマは、突然、途切れ途切れに、シンブルな答えを返した。それはどうしようもなく、彼が行える最大の回答だったのだが、斎藤はそんなことに気をかける余裕もなく、その情報量の少なさにため息を吐く。

「はあ……」

「悲しいです……」

何故か、クーリリと呼ばれた彼女も悲しげに目を伏せた。斎藤はいよいよ訳が分からない。理解も及ばず、しかも頼れる人もいない。もう、この奇妙な二人組に助けてもらおうのもいいかもしれない、と疲弊しきった脳は答えとも言えない思考を弾き出した。

逆に考えよう、普通の二人組なら疑う。しかし、相手の一方は喋る猫だ！ まるでおとぎ話の存在だ！ もはやこれ以上騙される可能性はない……はず、と斎藤は言い訳を並べるように、自分の選択に理由を付けていく。

『あなたは、騙されやすいのよ』

しかし、そんな妻の呆れ声が脳裏に浮かぶ。それがいつのことだったか、斎藤には思い出せない。それもまた、斎藤の言い訳なのかもしれないが、それを疑うこともなく、彼らに頼ることは決まっていた。

「で……俺の嫁を探すって言っても、どこへ？」

「任せたまえ。簡単に見つけてやろう。主にクーが」

「頑張ります！」

両手を降ろし、前で合わせ、そんな風に意気込む。黒猫にしてもこの少女にしても、斎藤の認識を越えて、ずっと先に行っている。

「……はい」

だから、斎藤は頷き、従うことしかできなかった。

斎藤は気づく。まるで、不思議の国に迷い込んだようだ、と。

「そう言えば、最近テロが起きているのであろう？」

住宅街にも人気はなく、家々から聞こえるであろう生活音は、死に絶えたかの様に消えていた。自分だけが異界に迷い込んだのか、はたまた、住民たちが斎藤を置いて行ったのか。

そんな突き刺さるような静寂の中、ニット帽の少女、クーリリの先導で一行が歩く途中、黒猫、シーマが唐突に問い掛けてきた。斎藤が呆気にとられて、困惑した表情をシーマに向けると、シーマは取り繕うように慌てて言葉を付け加えた。

「いや、新聞を見たのだよ。たまに落ちている」

「ああ……確かに、そういう説もあるけど」

斎藤は何の影もない青空を見上げ、ぼつぼつと、テロと呼ばれた事件について思い出す。

事件が始まったのは半年ほど前のことだ。

ある日、一人の政治家が死んだ。彼は糖尿病で入院していたのだが、容体が急変、死亡という流れを辿ったので、始めは病死と思われていたが、後の解剖により毒殺だと分かった。犯人は見つからなかったが、それを皮切りに政治家、活動家、様々な人が不審死を遂げた。彼らの共通点の一つ、多くの人々に支持されていたこととだ。

多くの事件ではピンポイントで要人が狙われていたが、稀に一般人が巻き込まれることがあったため、マスコミの一部はテロ説を主張している。また逆に、大勢が狙われたケースが少ないことから、政敵による暗殺説なども騒がれているが、事実はまだ闇の中だ。

「嫁さんが巻き込まれないか心配なんだよ」

連絡がつかないため、すでに巻き込まれている可能性もある。この事件に限ったことではなく、世の中にはびこる事件の一つであっても、関われば危険なのだ。

「そうか……確かに、そうだな」

苦々しげにシーマが同意した。場の空気を読んだのか、重苦しい口調である。

「斎藤殿、細君以外に親しい人間はおらぬのか？ 頼ることができような」

最もらしい質問だ。

「ほら……俺はここに引越して来たよそ者だし、編集者も事務的な会話しかしないし、いないんだよ」

斎藤は学生時代の友人の顔を思い出す。卒業式は何年前のことだろうか、それ以降電話で話すこともない。斎藤が忙しい、というよりは同級生が忙しいのだろう。

「誇らしげに友人がいらないことを露呈するのだな……なるほど、吾輩たちの申し出を受けるわけだ」

「的確な物言いだな？ ええ、おい？」

「ケンカはだめですよ」

不穏な空気だと思ったのか、少したどたどしくクーリリが止める。その瞳はおどおどしていて、怯えの混じる怒りが感じられた。目は口程に物を言う、ということわざがあるが、まさにその一例である。

「そうだ、喧嘩は実によろしくない。本当のところなら決闘だが、そこまですることではない。何故人は争うのか」

「……………」

斎藤がしぶしぶと歩いて行くうちに、辺りの景色は、高級住宅街から、高層ビルが立ち並ぶ市街地に変わっていた。普段なら車や人通りは多いのだが、今に限っては何も無い。不気味なほどに音もなく、昼間の明るい太陽が、不釣り合いに輝いていた。ガラスに反射した光がまぶしく、斎藤は目を閉じる。何故か、妻の顔だけは思い

出せなかった。

「なあ、齋藤殿」

「どうした、急に立ち止まって」

しばらく歩いてみると、ある大学病院の前で、クーリリとシーマは立ち止まった。シーマは重みを持った真剣な声を、クーリリは今にも泣きだしそうな悲しい顔を、それぞれ齋藤に向けた。太陽が心なしに暗くなつたような感覚に襲われ、齋藤は足に緊張感を持った。それでもしないと立ってられないような予感が心の底から染み出し始める。

まともではなかった。ありふれていたはずの光景は、今やズレだらけのものとなり、一般常識などない、正しいことなどない世界に來てしまった。

何故人がいないのか？ 何故猫が喋るのか？ 何故初対面の少女が自分を知っているのか？ 何故、何故、と幾多もの疑問が齋藤の頭の中で渦巻く。

解答はない。

「細君に会いたいのか？ 自分が何であつても、細君が何であつても、それを知りたいと、其方は望むか？」

「……………」

目の前の小さな黒猫が、自分よりも大きく、厳かな威圧感を持っている。そんな錯覚か、真実か、齋藤には分かりはしなかったが、気が付いて身構える。

「私は、齋藤さんに助けられましたから、少なくとも味方です。最後まで、この頼み事には従います」

感情的な声を震わせて、彼女は言った。それですらも、錯覚か真実か判別は付かなかつたが、齋藤はこの二人を信じようと思つた。

妻に何があつたのかは知らない。何か重大なことがあるのなら知るだけであり、それが自分の役目だと思つた。彼らの態度からすれ

ば、妻の失踪と彼らには何か重大な関係があるのかもしれない、ないのかもしれない。

しかし、齋藤にそのようなことは関係なかった。

これはおとぎ話だと、書き手は考え、そして彼は彼自身のおとぎ話に立ち会つていく。まるでおとぎ話の主人公のように、最後まで知らないといけない、と齋藤は狂つたように唱え続ける。その姿は狂つたような人間ではなく、まさしく狂人であつた。

自分以外の価値観が消えた世界で、一般常識を持った男は、段々と目に見えるものを受け入れていった。たとえそれが正気であつても、狂気の沙汰だとしても、区別をつけることは誰にもできないことだつた。

「嫁さんに会いたい。嫁さんに会うんじゃない、嫁さんに会おうということをしなきゃいけない」

「……………」

シーマは、そんな責務に憑かれた狂人に、一週間前の新聞を渡した。

その大学病院の入り口にも、スタッフルームにも鍵は一切かかつていなかった。

霊安室を見て回つたが、目的のものはなく、結果、遺体安置所に出向く羽目となつた。寝袋のジツパーを一つ一つ開いていき、中身を確認していく。クーリリだけはびくびくしながら行つていったが、他の二人は微動だにせず、速度を上げて、確認を終えていった。

「デパートで爆発事件が起きると、こんなにも多くの人間が死に至るとは……吾輩の知識も浅薄なものだつた」

一週間前の新聞には、デパートにて爆発事件、という見出しの記事が載つていた。一人の政治家が死亡、そして巻き込まれた一般人の死傷者多数、と続き、死者の中には齋藤の妻の名前もあつた。

「俺の妻はもう死んでいたのか……」

一つの寝袋を開き、斎藤はほっとしたような、満足げな笑みを浮かべた。そこには人間としての形状しか残していない遺体があり、誰であつても斎藤の妻だと確信はできなかったが、斎藤は迷うことなくその手を取り、撫でる。結婚指輪すらも残っていない、黒くなつた手は、斎藤に撫でられ、かすかに動いたように見えた。静かに、時間は過ぎる。

「そうだ、思い出した……」

斎藤は報せを見た直後、すぐさま収容先の病院であるここを目指し、家を飛び出した。息を切らして、結婚指輪を握りしめ、人のまだいた街を駆けてゆく。しかし、ある横断歩道にて、突然、巨大なものに吹っ飛ばされた……。

「俺は轢かれたんだ……」

「大丈夫か？ 楽しい記憶ではなからう？」

シーマが心配そうに聞いた。今更心配したところでどうなるものではないとシーマは分かっていたが、それでも、聞かずにはいられなかった。

「大丈夫だ」

斎藤は、シーマに心配させないように言う。何故か、妻の死のダメージはなかった。すでに人がいないことから、感覚がマヒしているのかもしれない。

「そうだ、妻の死を知った其方は、車に轢かれて、ここに来た。吾輩は世話になつたからな、こうして、其方と会話することができた。食事の恩ならこの程度しか、其方に寄り添えないのだ」

ルール、なのだろうか。

「私は、斎藤さんに命を助けられたんですよ。だから、ここまで」
クーリリはつま先立ちでターンすると、斎藤に笑いかけた。

斎藤はその行動の意味を悟り、目の前の華奢な少女に感謝した。

「そうか……それはよかつた……と言つていいのか」

ああ、そうだ、とシーマが口を開く。

「自殺する気は、ないのか？」

シーマは質問のあと、斎藤が自殺を試みたのではないかと考えた証拠をいくつか挙げていった。妻の死、赤信号を渡つたこと、そして、車に轢かれるはずだった犬を、意図せずして助けたこと。斎藤は意識を失う前、犬に顔を舐められていたことをうつつすらと思ひ出した。割と気持ち悪かつた。

「吾輩は食事を与えてもらったから、話せるようになった。クーリリは命を救われたから、人の姿になれた。それは全て、其方の力になるためだ」

「わくしゅんっ」

「……クーリリのこの奇妙なくしゃみは元のままでが」

狐に鼻をつままれる。そんな現象が目の前で繰り返られていたようだ。悲壮感はなく、妻の死も乗り越えられそうで、斎藤はただ、自分の心にすらも置いて行かれたような気分になる。

「自殺はできない。二度とこんな目に遭いたくないし」

返事を聞いて、クーリリが安心したように微笑み、頷いた。シーマに関しては皮肉そうな笑い声を上げる。静かな安置所にて、二匹と一人は安心していた。

「では、さらばだ」

「ありがとうございました！ また、また会えたら！」

斎藤の意識は遠のいてゆく。死者の眠る場所は、穏やかに彼を送り出した。

「……おはようございます」

斎藤は目が覚めると、例の大病院、その病室にいたのだと分かつた。ベッドに寝かされて、点滴が繋がれている。ベッドの足元側には看護師が立っていて、斎藤が目覚めて挨拶するや否や「喋つた……！」と吹き、病室の外へと出て行った。

それから程なく、白衣を着た三十代ほどの男性がやってきて、斎藤が挨拶すると「喋つた……！」という反応を返された。日付は、

ちようど事故に遭って一週間後であった。

「いや、一週間って、長いっすよ。よくもまあ、目覚めなかつたすねえ」

特定の箇所だけ滑舌が悪い彼は、どうやら斎藤の主治医のようで、彼なりに回復を喜んでいらしい。すらすらと書類に記入を加えていく手際は相当の速さである。

「まさか、大怪我で入院とか……」

斎藤は聞く。身寄りがないのだ、荷物でも必要になったら取りに戻る人材がない。

「いや、目覚めたからにはあまり時間はかからないと思いますよ。童話作家なんすっけ、編集者の人が着替えとか用意してくれてました」

良かったっすね、と笑顔で結ぶ。

「それは良かった……」

「ところで……」

主治医が声を落とし、眉をひそめて話題を変えた。

「どうしました?」

「あの……猫を連れた女の子が面会求めてきてたんすね。妹さんか何かですか? ここは病院なので、一応ペットは持ち込み不可なんすよ」

「あー……」

斎藤は納得して、そして困惑した。余りにもアフターサービスが万全すぎる。

と、そこで、病室の外から、わくしゅんつ、と特徴的すぎるくしやみが聞こえ、主治医が怒って出て行った。

看護師がくすくす笑う。斎藤は困って、呆れ顔を窓の外に向けた。やがて、春がやってくる。

おしまい

台縁奇縁の共同制作

小刀

「卒業式も終業式も終わったし、学年変わるまで退屈だねー」

「そんなことを言っている暇は無い筈なんですが」

棚や椅子といった最低限の備品しか無い一室。廊下側の扉に「オカルト研究会」と書かれた部屋の中で、長机を挟み私ともう一人の人物はそれなりに重要な相談を行っていた。

「新入生の入部期間中に五人集めなければならぬんですよ。私達を除いても最低三人」

「何回聞いてもやつぱりめんどうだよね」

「その面倒な条件を守れないせいで廃部しかかっているのはどこですか。というか本来なら、ここもう潰れてるんですよ。染井先輩は自分が先輩と一緒に頭を下げて頼み込んだことも忘れたんですよ」

「あー、あつたね、そんなこと」

「……」

頭が痛くなってくる。打つても響かないというか、「豆腐に釘を打ち込むような手応えの無さというか。学年差さえなければこの人が部長になるなんて惨事は起こらなかつただろうに。」

「それで、何かアイデアは浮かびましたか」

「ないよー」

「……無いつて」

「だつてさ、何か『ここはオカルトを研究してるんですよ』って主張できる物がいくらでもあるんだからそれ使おうよって思ってたんだよ。けど先輩たちが全部持って帰っちゃったせいでここ殆ど空き倉庫じゃん、だから私は悪くないって」

「自分の所持品を持ち帰った先輩たちも全く悪くないですよ。と、というかそんなのは普通に予想できるでしょうに」

「いやいや、というかさつきから否定ばかりだけどさ、そういう

縁ちゃんは何か考えたりしてないの？」

自分から振っておいてではあるけど、この十数分の会話でもし、かして要らなかつたんじゃないだろうか。なんて思いは胸の奥にしまふことにする。

「とりあえず考えたのは、有名どころな感じで学校の七不思議でも作って流布しようかと思つたんですが」

「流布」

「問題なのは書ける人間がいないことなんですよ。私は執筆なんて未経験ですし、先輩には期待できませんし」

「さつきから縁ちゃん毒舌ひどくない？ というか期待できないなんてシヨックだね……これでも友達にそういうのバリバリな子いるんだよ？」

「じゃあ書けるんですか」

「まあ書けないんだけどね」

なら最初から期待させないでください。一瞬、ほんの一瞬でもひよつとして思つた自分が哀れでしょうがない。

「けど、自分で書けないなら誰かに代筆してもらえばいいんじゃないかな。私たちが原案を出したつてことにすれば一応オカル研の活動つてことに出来るだろうしさ」

「確かにそれも考えたんですが、私たち以外にメリットがないこんな提案に乗つかる人なんて——」

——そうそういないはず。そう続けようとしたところで突如、部室のドアが大きな音を立てて開かれた。何事かとそちらに振り向くと、見知らぬ女子学生——見たことがないことから察するに二年生の人？——が何故か仁王立ちでこちらを見つめていた。というか入つてきた。後ろにずかずか、つて文字が見えるような勢いで。

「話は聞かせてもらつたよ！」

「あれ、理恵ちゃんどうしたの？」

「こつちの危機を脱するための妙案が聞こえてきたから来た！」

「おお、それは凄い」

「というわけで、もっと詳しく！」

この人はどうやら染井先輩と知り合いらしく、私が混乱しているのを余所にとんどん話を進めていく。どうしたものかと入口で立ち往生していると、不意に肩を叩かれた。

「うちの部長がごめんなさい、驚かせちゃったね」

「い、いえ。えつと……」

「ああ、私は文芸部で副部長をやっている野中美紀って言います。千春……は分かるよね、この部長の染井千春。あともう一人、あそこで話し合っているこっちの部長の三島理恵と私で三人同じクラスなの。よろしくね」

「ご丁寧ありがとうございます、オカルト研究会一年の千原縁です」

お互いに自己紹介を終える。どうやらこの人はあの二人と違って落ち着いたいい人らしい。どうかさつき染井先輩が話していた

「友達」って、もしかしてこの人達のことなのかな。類は友を呼ぶってというのが、向こうの会話から伝わってくるし。

「それで、危機とは一体？」

「よく聞いてくれた！」

そこに先ほど話題に上がった三島先輩が割り込んできた。うちの部長をテンション高くしてウザくしたらこんな感じになるんだろうなと思いつつ話を聞く。

「アタシら文芸部、今部員が二人しかないのよ。だから」

「廃部しかかっている？」

「そうそう！ んで、何か書いて出さないと新入生釣れないってのは分かっているけど、ネタが全然思い浮かばない！」

「はあ」

「そしたら、そっちで何か『学校の七不思議』でも書かせて出版しようって聞かしてきたからこれ使えるじゃないかと考えた！」

「出版とまでは言ってませんが」

「細かいことはいいの！ とにかく、こっちはネタが確保できるし

そっちは書き手が確保できる。しかも文芸部とオカルトの合作ってことで話題性も二倍！ そっちとしても受けない手はないでしょ？」

言われてみれば、理に叶っているのは事実。書いてくれる人がいるなら、こちらとしても願ったり叶ったりだ。ただ何故か、早口でまくし立てる漠然とした不安があるんだけど。

「確かにそうですけど……」

「でしょ！ ってことで千春連れてくからみのりんは後輩ちゃんよろしく！ んじゃ！」

「ネタ集め行ってくるねー」

どたどたと、と慌ただしく部屋を後にした二人。部屋には私と野中さんと、あとは気まずい空気だけが残された。

「……うちの部長がごめんね、ほんと」

「野中先輩が謝ることではないんじゃないでしょうか」

「さんでいいよ、っていうのは縁ちゃん次第か。とりあえず、こっちの部屋に来る？」

「と言いますと」

「私、学校では部屋のパソコンで作業してるの。だから話をするにしても書き始めるにしてもそっちの方がありがたいかなって」

「なるほど、分かりました。ではここはもう施錠しますね」

そう言いながら自分の荷物をまとめていく。部屋に何も無いおかげで、中で暴れられても散らかる要素がなかったのは結果的に救いだったな。

……ところで染井先輩の荷物どうしよう。いつ戻ってくるか分からないし、文芸部さんに持ち込ませてもらおうかな。

~~~~~

「大したものはないんだけど、まあ楽にしてね」

「お邪魔します」

そうして訪れた文芸部の部屋。柵は本で埋まっているし執筆用であ

ろう原稿用紙や筆記用具もしっかり常備されてる上、きちんと整理整頓までされている。物がなから綺麗に見える「だけ」のオカ研とは大違いだ。……というか文芸部ってオカ研の隣にあつたのか、道理で私達の会話が聞こえるわけだ。

そんなことを考えていると、野中さんはある種場違いとも思われそうなノートパソコンを操作しながら口を開いた。

「それで、縁ちゃんは何かストーリーとかを考えてたりする？」

「あー、クラスメイトが言ってたんですけど、一階の男子トイレあるじゃないですか。和式の個室って校内でそこ一箇所しかないんですよ」

「へえ、初めて知った。まあ男子トイレの構造を熟知してる女子っていうのも恐ろしい話だけだ」

「全くです、まあそれはいいとしても。それで一回衛生上の理由だったか何かで大掛かりな工事が入って、和式が軒並み洋式に変わったんですが。今言ったようにそこだけは工事が入らなくて」

「うんうん」

「実際は予算の都合だったそうなんですけど、『トイレに居付いた地縛霊か何かが強すぎて、手を出すことが出来なかった』みたいに出来ないかなというのをまず考えました」

「なるほど。一つだけ違うって物には、どうしても興味が駆り立てられるしね。面白いと思うよ」

こちらを見てそう言いながら、目にも止まらぬ、とまではいかないにしてもかなりのスピードでパソコンに文字を打ち込んでいく。私はパソコンがそんなに得意じゃないから見惚れるばかりである。

「一つ目はこれで決定ね。他には何かある？」

「えっと、他だと……」

「『人体模型が保健室にあるのは、理科室の骨格標本と一緒にすると喧嘩を始めるから』」

「前世でよほど仲が悪かったのか、はたまた喧嘩に見えるだけで双

方からすればじやれてるだけなのか。どっちなんだろうね……って、前に前世はなかったか」

「『警備員室にて、月に一回幽霊が警備を担当するため、明かりもないのに青白く光る』」

「未練って影響大きいよね。その幽霊、例えばトイレの幽霊の事件知っててそれが未練になってたりして」

話がまとまるのにそこまで時間は掛からず、十分程度話し合った後

「そして、今までこの話が明らかにならなかったのは『七不思議調べた人間が行方不明になっていたから』でまとめようかなと」

「じゃあ『何故今回明らかになったか、それはこの話がフィクションだったから』。これで七つ全部ね。あとは全部書いておいて四人でどれ載せるか相談しようか」

「よろしく願います」

そこで一息つくど、二人して時計を見る。学校に来たのは一時で今は三時、まだ二時間しか経っていないのかと少し驚く。

「それじゃ、まだ時間あるし書き始めるね。何か興味ある本があったら読んでくれて構わないから」

「……流石に書いて頂いているのにそれは気が引けます。もしよければ作業している様子を見ても構いませんか」

「そんなことでいいなら勿論大丈夫だよ、面白いかは分からないけど」

そう言うと、野中さんはパソコンに向き直りキーボードを叩き始める。角度的に何が打たれているかは読めないが、ペースからして順調に書き進めているというのは分かった。

そこから三十分は経つただろうか。手元と画面を交互に追うのにも飽きてきたところで、ふと彼女の顔に目をやってみると、画面を見つめる彼女の目は輝き口元は綻んでいた。指が止まらないのも含

めて、相当順調なんだろう。

「書いてるの、すごく楽しそうですね」

「うん、楽しいよ？ なんせ好きでやっつてることだし、特に今日は筆が進むしね」

声音からして、本当に楽しそうなんだというのが伝わってくる。やっつたことの無い私には分からないけど、などと考えていると。

「そうだ、せっかくだし縁ちゃんも何か書いてみない？」

「え、えつと……そういう経験はないんですが」

「大丈夫大丈夫、そんな無茶苦茶上手いのを作れっつわけじゃないから。紙だっつていっばいあるし、ね？」

「で、では折角ですし……」

そうして私が受け取ったのは鉛筆と原稿用紙が五枚くらい。折角だしさっきの模型の話でも書こうと紙に鉛筆を置いたものの、どう書き出したものが全く分からない。頭を抱えて唸りながら指を動かすと、文字とは到底思えないぐちゃぐちゃした何かでマスが埋まってしまった。それを消しゴムで消し、書いては消しの繰り返し。さらさらだった紙がしわくちやになるまで、そんなに時間は掛からなかった。

「よし、こんなものかな……つて縁ちゃん大丈夫？ 大分しんどそうだけど具合悪い？」

「そういうわけじゃないんですけど……一文字目から何を書けばいいか分からなくて、そのせいで一向に進まなくて」

よほど調子が悪そうに見えたのだろう、病人を心配するようなトーンで声を掛けてきた野中さんの顔は明らかに曇っていた。その理由が「始め方が分からなくて四苦八苦してる」というのがなんとも情けない話ではある。

「んー、縁ちゃん何書こうとしてたの？」

「さっきの人体模型と骨格標本の話」

「あー怪談か、なら最初に理科室と保健室の説明を入れるとかしてさ——」

~~~~~

——室内に響き渡るチャイムの音。つられて顔を上げると時計は長身と短針が一直線、六時を示していた。ついさつきまで四時にもなっていないかった筈、と思いつつ視線を戻すと、そこには自分の文字で埋め尽くされた原稿用紙が五枚ほど。二人で話し合っていただけの内容が、はつきりした形で物語として出来上がっていた。

「あ、縁ちゃんお疲れ様。何回か声掛けたんだけど、すごい集中力だったね」

「ありがとうございます。……というかこれって、私が書いたんですか」

「そうだよ、まあ私はまだ読んでないんだけどね」

「では、部屋を出るまで一緒に見てもらっても構わないですか」

「喜んで、というか是非読ませてもらいたかったし」

重なっていた用紙を分け、二人で一枚ずつ目を通す。いつもの会話では色々な言葉が出てくるのに、この紙の中には凝った言い回しなんて全然なくて、とにかく思い浮かんだものをそのまま書き殴ったような、そんなつたない印象を受ける。内容にしても考えてた時はスマートだったのに、こっちでは何でこんな場面を入れた、何でこれは入ってないんだ、と何とも言えない微妙さが残っている。それでも……

「これ、ほとんど私一人で書いたんですよね」

「殆どっていうか全部って言ってもいいよ。私はちよつと口を出しただけだから。それで、自分の書いたの見てどう思ったかな？」

「やっぱり作家さんや先輩みたいに綺麗で上手には書けなくて、すごく難しいなって思います。けど」

「けど？」

「……何でしょうね、この達成感と言うか満たされた感じと言うか。上手く言えないんですけど、書いてる間は苦しかったはずなのに、

今はすつきりしてます」

全然進まないときにはやめたいやめたいと思うこともあったのに、こうして完成した物を見ているとそんな気持ちが薄らぐよう。やめなくて良かったという思いで胸が満たされている。とそこで、自分の右手が真つ黒に汚れているのに気づいて。ああ、これも頑張った証なんだろうな。

「なるほどね。そういえば縁ちゃんはず、さつき私に楽しいかって聞いてくれたよね」

「はい」

「今縁ちゃんが思っていることがその答えだよ——なんて言えたら良いんだろうけど、やっぱり難しいね、思っていることを形にするって」
ぼつが悪そうに頬を掻く野中さん。私に苦勞をかけちゃったと思っているのかな？ それに対し、私はなるべく笑顔を意識して。

「いえ、何となくですけど、分かった気がします」

「……そっか、なら良かった」

そうして、今度は二人で笑い合う。色々なことから解き放たれたような気持ちのいい笑顔で。

「あの、野中先輩」

「先輩はいいって。それで、どうしたの？」

「明日もまた、ここに来ていいですか？」

明日もまた、この人と二人で「何か」を書いていたい。そんな思いを乗せて一言。そして。

「もちろん、こちらこそよろしくね」

「……はいっ」

学年が変わる前の、春休みという短い期間。何もすることはないだろうなんて思っていたけど、まだまだこの楽しい日々は続きそう
で、本当に良かった——

「……ところであの二人、戻ってこなかったね」
「どこまで行ったんでしょ、ホントに」

掌

ツリウム

〔四〕

一人の男が地面に横たわっていた。ピクリとも動く様子はない。身体の一部が欠けていたりはずれ、傷があるわけでもない。それでも、微動だにしない男の姿はどこからどう見ても死、そのものであった。

今が冬だからかその姿は綺麗なまま保たれているものの、春がくれば腐り、虫に集られ、いずれは骨だけになることを予感させる。

そんな、珍しくもない亡骸だった。

〔一〕

ヒヨウヒヨウと冷たい木枯らしが吹く中、男は頭を下げていた。場所は寂れた神社の賽銭箱の前。しばらくして頭を上げた男は大きく二回手を叩き、もう一度頭を下げた。

いわゆる神頼みである。

しかしその顔には生気がなく、表情も陰鬱。痩せこけた体にはぼろ切れのような布を被っているだけだ。そんな男が祈るのは来世の幸福。男は今から自殺をしようと考えているのだ。仏教の死生観である輪廻転生について神社で祈るといふのもおかしな話ではあるが、神や仏について考えたことなど皆無の男は疑問に思うこともなく、深く腰を折ったまま、自らの過去を振り返る。

彼の人生は悲惨そのものであった。

親は幼い頃に死に、親戚をたらい回しにされた拳句に辿り着いた家では都合のいい奴隷として扱われた。

成人を期にその家からは追い出され、喜んだのもつかの間、学も力も持たない男はろくな仕事に就けなかった。

やっと見つけた仕事先でも、雀の涙ほどの賃金で馬車馬のように働かされた。

今までの反動からか博打にのめり込み、少し勝っていい気になったところで儲けた額の何倍も雀り取られた。

そんな生活を続けた結果、いつの間にか借金が膨れ上がり、今に至る。

自らの過去を想起し終え、最後にもう一度生まれ変わった後のことを祈ると男は顔を上げた。今男がいる神社は借金で首の回らなくなった時、職場仲間との話で聞いた場所である。

曰く、死ぬ直前にこの神社に参拝すれば後腐れなく死ぬことが出来、また来世は明るいものになると、一部で有名らしい。どこまで本当か分からない出所不明の噂ではあるが、それこそ藁にもすがる思いでここまでやってきた。

男は頭を上げ踵を返すと、懐に入れてある縄の感触を確かめながら急ぎ足で境内を後にした。

〔二〕

死ぬためにわざわざ山を上るのは不合理なことだ。

どうせ結果は同じなのだから、練炭を使うなり首を吊るなり、近場で効率的に行う方法はいくらでもある。しかし、生い茂る樹木が木漏れ日を作る中、さほど険しくはない山道を男は歩いていた。

勿論、他の方法を思いつかなかった訳ではない。男は無学だが、

決して無知ではないのだ。しかしその直後、どうせ死ぬならば誰にも見つからない場所で逝きたいと考え直した。

深い意図などない。強いて言うならそれは、今まで他人の命令に従うだけだった男の、文字通り最後の意地だろう。ちっぽけではあるが、だからこそ、初めて自身の意思を通せるような気がして、男はそれを実行することにした。

そうしてひたすら歩を進め、辺りが薄い闇に覆われた頃、不意に感じる腹部への衝撃。さほど強いものでもなかったが、奇妙に思っ
て下を見ると、その不可思議な光景に男は目を見開いた。

目線の先には手——正確には手首から先があり、通せんぼでもするかのように掌を此方へ向けて浮いていたのだ。

それは一見ただけで尋常ではないと分かる姿をしていた。

形の上でならば、それが手であることは間違いない。しわの刻まれた掌からピンと上へ伸ばされた五本の指が生えており、それが人間の手であることは明白だ。

ところがその手は、常に姿を変えていた。まるで長年使い込まれた老職人のようにも、またしみ一つない妙齢の女性のようにも見えるそれは、男が絶句している今もその様相を刻一刻と変化し続けている。

「うわあ、バケモンだ！」

驚愕を恐怖に変え、男は叫び、走り出そうとするがしかし、直ぐに男は動きを止めることになった。

浮いていると思っていたその手の先、体や足や頭が出現したのだ。現れたその姿にどこもおかしいところはない。いや、強いて挙げ
るならば、このような日暮れ近い山の中に居るのがおかしいだろう
か。なにせ、その人物は真つ直ぐ伸ばした手が男の腹に当たる程度
の背、つまりは幼子であり、しかも女兒のようだ。

化生の類ではなかったか、と男は安堵したようにため息をつく
同時に当たり前の疑問を抱く。今し方の光景は黄昏の暗影と男の過

敏になった神経によって生み出された幻像だったとしても、目の前の少女は何故このような時間にこのような場所へ訪れたのだろうか。
と。

男は一瞬の間難しい顔をするも、直ぐにそれを引つ込め何かを諦めたような表情を浮かべて、未だに掌を男へ向け続けている少女へ
声を掛ける。

「大声出しちまってすまん。しかしどうしたんだお前さん、こんな場所
で何か用事でもあるのかい？」

少女は男の問いに返答はせず、代わりに無表情で首をゆるゆると
振った。

「だったら早く里に帰りな。夜の森は危ないぞ」

男の注意に少女はやはり答えを返さず、今度は男が来ている服の
袖を掴み、軽く引つ張った。

「……もしかして帰り道が分からなくなったのか？」

その言葉に、少女は首を縦に振って男の顔をじつと見つめるだけ。
出会ってから一度も話さない少女を訝しがりながらも、男は言葉
を続ける。

「面倒なことになったな……まあしかし、何かの縁だ。里まで連れ
て行ってやろうか？」

億劫そうな表情を隠そうともしない男だが、それにそぐわぬ親切
な提案。

少女は頷き、手を差し出す。

よし来たと彼女の手を引いて、来た道を引き返そうとする男。し
かし少女はその場から動こうとはせず、男の足は再び止まった。

今度は何だといわんばかりに男が振り向くと、少女は首を横に振
りつつ逆方向へ指を指している。

「そつちには森しかないはずだが……。なんだ？ そつちから来た
のか？」

少女はやはり口を開こうとはしないで、肯定の意を示す。

男の知る限り、少女の指差す方向に集落はない。また、男の方向

感覚が狂っているということもないだろう。なぜなら、山奥へ進むのに道路でない道、獣道を使っているからだ。曲がりなりにも道は道。山に入って直ぐに見つかったこの道が何処で途切れるかという懸念はあるものの、今のところは里近くから一本に繋がっている。当てもなく歩くよりかはマシかと選んだが、里へ帰るとなると頼りになるだろう。

と、そんなことを男が少女に説明しても、彼女は頑として動かない。

そうして、不毛とも思える説得に疲れた男はある考えに至った。

「……ああ、もう分かったよ。そっちについて行ってやるから、帰るぞ」

それはいつそのこと、少女の指差す方向へ向かうのも良いのではないかとこの男が思った。

たとえ帰ることが出来なくなつたとしても、別段男は困らない。せいぜい首を吊るのが少し遅くなるだけだろう。幸いにして、首を吊るための木はそこら中に生えている。

自殺を決める前ならば見知らぬ少女を文字通り道連れにするなど、どうあつても実行不可能だつたらうが、摩耗した男の頭では最早真つ当な判断を下すことさえ出来ない。

最初に道案内を提案したのも、気まぐれと、最後に良いことでもすれば閻魔様の評価も甘くなるかなと言う下心からである。

少女はそんな男の手を引いて、山道を歩み出した。その足取りに迷いはなく、むしろ明確な目的地に向かって進んでいるといった様子だ。

そんな少女に、男はふと疑問を覚えた。

「そういえばお前さん、迷つてたんじゃねえのか？ どうも俺にはそんな風に見えないんだが」

思わず問うた男の声に、少女は無反応で応じる。

その態度に閉口した男は掴んだ手を離すことも出来ず、音も無く歩き続ける少女にやはり何も話さずついて行くほかなかつた。

【三】

「へえ、こんな所に人里があつたのか」

日が落ち、少し欠けた月の明かりだけが地面を照らす時分、男と少女は質素な家々が立ち並ぶ人里の前で足を止める。結局、二人が出会つた獣道が途切れたのはこの場所の目と鼻の先の地点だ。

男の住む町は人がそれなりに多く、他の人里の情報も交易などを通して入ってくる。幼い頃から虐げられてきた男は情報通というわけではなかつたが、それでも常識として近くの人里くらいは覚えていた。

だというのに、距離や方角、また両者をつなぐ獣道のどれもが、男の知る近辺の人里とは合致しなかつた。

あるはずのない人里の存在を知つて、男の胸中には暗れ間より先に疑念の雲が浮かぶ。

「なあ、ここは他の人里と全く関わつてこなかつたのか？ こんな場所は聞いたことがない」

そう言つて、反応を窺うために少女がいた場所へ目を向けた男だが、しかし少女の姿が見当たらない。辺りを見回しても走り去る姿さえ確認できず、男は一人肩を落とす。

「あいつ、人里に着いた途端俺をほっぽつて帰りがつたのか……」
そうしている内に、いつの間にか近づいてきたのか、男と同じくらい質素な服を着た一人の老婆が彼へ声をかけた。

「もし、そこのお方。こちらでは見えない顔ですが、何用でこの村までいらつしやつたのですか？」

「ああ、山の中で道に迷つた少女がいたもんでな、ここまで連れてきた。といつても、門をくぐつた途端に逃げられちまつたが」

「……あら、それは有り難いです。後でその子にはきちんとおきますね」

男は老婆の言葉に曖昧に頷き、「じゃあな」と残して門へ向かう。それを再び呼び止めたのは、先程と同じ声。

「ちよつとちよつと、もう夜も遅いことですし、ここで泊まって行かれては？」

「いんや、持ち金も無いからな。今からでも帰ることにするよ」

「この村の子供を助けてくださった方からお金なんてとりません。」

といつても、もう時間も遅いですから今日のところは私の家に泊まってもらうことになりませんが」

少し考えて、人からの好意に慣れていない男は遠慮がちにひとつと頷く。彼は自殺をしようとはしているが、当然それを自ら望んではいない。周りを取り巻く状況がそれ以外の選択肢を奪ったのだ。だから男は、居てもいい場所があるのならと、一晩だけ自殺を延期することにした。

翌朝、久しぶりによく眠れた男はトントンという音で目が覚めた。それがどうやら野菜を切る音だと気がついた男は台所に向かう。

「朝、早いんだな」

「この村では自給自足が基本ですので、この位の時間には皆さん起きていますよ」

朝食は白米に味噌汁、それに漬物と山菜である。豪華とはいえない家庭の味だが、それは男が生まれてから一度も味わったことのないものだった。静かに感動しつつ箸をおいて「ごちそうさま」と言えば、老婆が「お粗末さまでした」と返してくる。

そんな、何気ないとも言える日常の挨拶が、男にとっては新鮮だった。

「良ければ、もう少しこの村へ留まっていかれませんか？ 子供を助けていただいたのですから、お礼くらいは」

短い朝食だけで心を奪われかけていた男は是非もなくその提案に乗る。

「では、この村の住人に軽く挨拶をして回りましょう。皆さんいい人ばかりですから、きつとあなたとも仲良くなれますよ」

「そう、貴方が……。すまないね、こんな山奥まで」

「別に大したことはしちやいなよ」

「謙遜しちやいけねえ、夜分遅くに幼子の道案内でこの村まで来るのは俺でも怖えよ」

男は今、五人の村人に囲まれ褒め殺しを受けていた。村のどこに入ってもこの調子で、昨日の夜の出来事にも関わらず、村人全員がそれを共有しているように見える。

当然これも男にとつては初めてだ。成功経験など無いに等しい男には、この環境がまるで天国のようにも思えた。

だから、男の選択はある意味当然だったのかもしれない。

「それでこの村に住みたい、と？」

「ああ、少しだけでもこの人達と話して分かった。きつと俺はこんな場所に生まれたかったんだ」

一旦村人たちから離れて老婆の家で昼食を摂った男は、老婆に自らの過去や自殺をしようとしていたことを包み隠さず話した。それにもし良ければこの村に住まわせてほしいとも。

「勿論、貴方ほどの方ならば大歓迎です。皆さんも喜んでくれるでしょう」

自殺を決めた時よりも緊張した顔の男にかけられたのはそれを肯定する言葉。安堵した男は思わず床に手をついた。

「良かった。断られたらどうしようかと思つてたんだよ」

「うふふ、そんなことするはずないじゃないですか。子供を助けてくれたこともそうですけれど、貴方はきつと優しい人です。そんな人が困っていたら、助けるのが当然ですよ」

さも当然のように自分を受け入れてくれる老婆に、男は一瞬目頭が熱くなったが、どうかそれを押しとどめる。とても嬉しい、人生で一番と言って良いくらいのこの気持ちに涙は合わないと、そう思ったのだ。

「では、この村へ住みたいのなら、という訳ではありませんが、丁度いいですし貴方に見てもらいたいものがあります」

「俺に見せたいもの？」

「そうです。この村に古くから伝わる儀式を、今夜執り行うのです」

満月が空に浮かぶ中、男は数人の村人と共に森の中を歩いていた。老婆はそれが古くから伝わる儀式だと言っていたが、村人たちは笑顔を浮かべており気負いのようなものは見えない。

そうして村が完全に見えなくなつてから数十分歩いた頃、一行の前に鳥居が現れた。

「へえ、こんな山奥に鳥居があるのか」

どこか物珍しげな様子でそれを見つめる男に、村人は顔と変わらぬ嬉しそうな声で鳥居に向かって立つように言った。見るだけじゃなかったのかと漏らしつつも、指示通りにする男。

「よし、じゃあ次は——」

男の背後には、いつかの老婆と同じく無意識の慮外の内に村人が立っていた。驚き、振り向いた男がその姿を捉えることは終ぞなかった。

「——ちいと、死んでくれや」

ドンと強い力で背中を押された男が頭の天辺からつま先まで鳥居をくぐつたその時、男の目には獣道で出会ったあの少女がぬらりと宵闇を縫うようにして現れたのが映っていた。

何が起きたのか分からないといった表情の男は、何一つ理解することの無いまま、意識を手放した。

〔四〕

「はい、お弁当です。今日も頑張ってきてくださいね」

「毎日ありがとうな」

「いえ、これも妻の仕事ですから」

男は机の上に置かれた弁当を、いつも携えている木の棒に引っ掛けて家を出た。

村で男は一人の女を娶つた。氣立ての良い女で、自分の嫁にしておくには勿体無い女だと、男はたまにそう思う。

「頼まれてたもんだ、確認してくれ」

声をかけた老爺は男の腕に傘をかける。

「相変わらず良い仕事だな、これからも頼むよ」

「ああ」

この老爺は職人氣質で気難しいが優しい人間だ。現に男は何度も、この老爺の知恵に助けられている。

この村では、誰もが幸せそうだ。些細な問題や喧嘩はあつても、力を合わせて解決される。男がこの村を出て行くことは無いだろうし、他の村人もきつとそうだ。皆、この村に骨を埋めるつもりで生きていく。

しかし、幸せに水を差す様だが、そこには一つだけ看過できない違和感があつた。

——この村の人間は、手首から先がない。男も、女も、老職人も、勿論道行く人々もだ。手首から先のない者達がそれをまるでなかった事のようにしている光景はどことなく不気味ですらある。

いや、話題にすら上がっていない以上、それはきつと些細な問題なのだろう。男の中ではきつと、自らの過去もあの少女のことも、

すべてが等しく些事に見えている。

だから、男の物語はここで終わりだ。

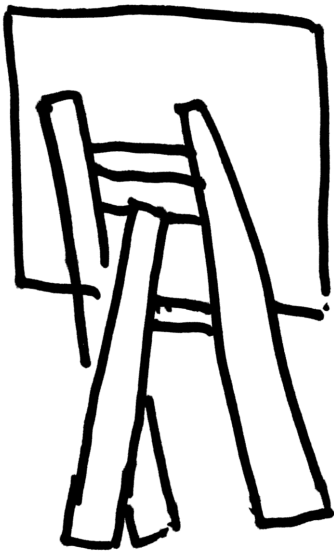
すべての問題が取るに足らない物になった以上、男は一生をこの村から出ずに過ごすことだろう。この場所が最高の幸せで、それを覆すものなど男の世界には存在しないからだ。

幸せの形は人それぞれで、男の場合はこの小さな村にしかそれを見つけれなかったという、ただそれだけの話である。

了

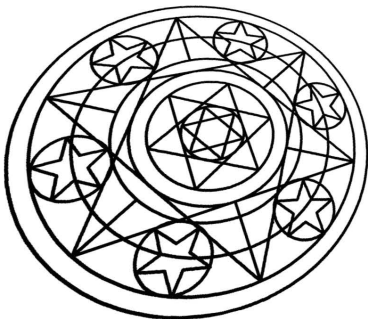
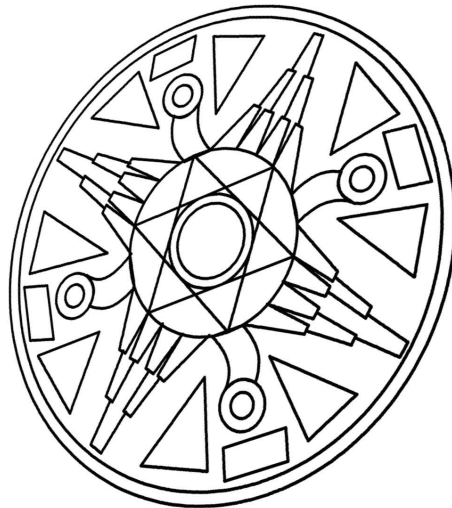
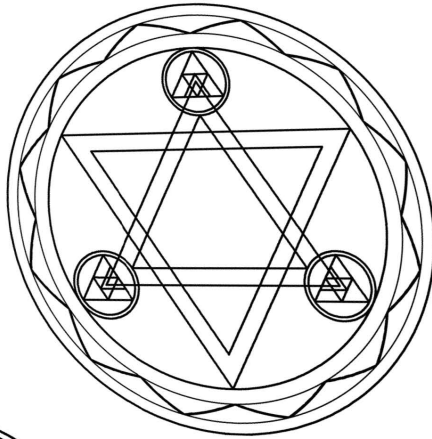
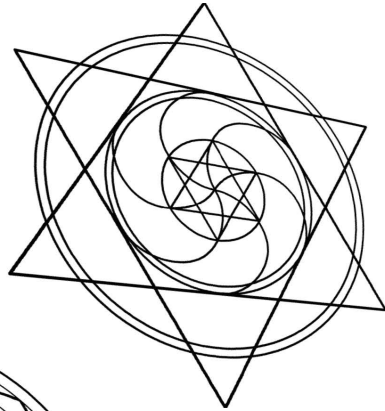
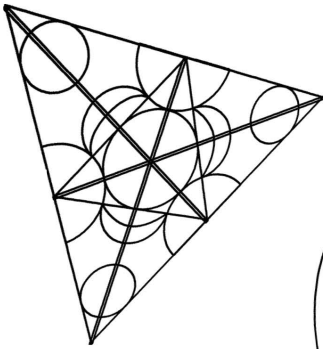
イラスト

作品





by クロ-ド





ぶっちー

いんすてーざい、猫にゃん





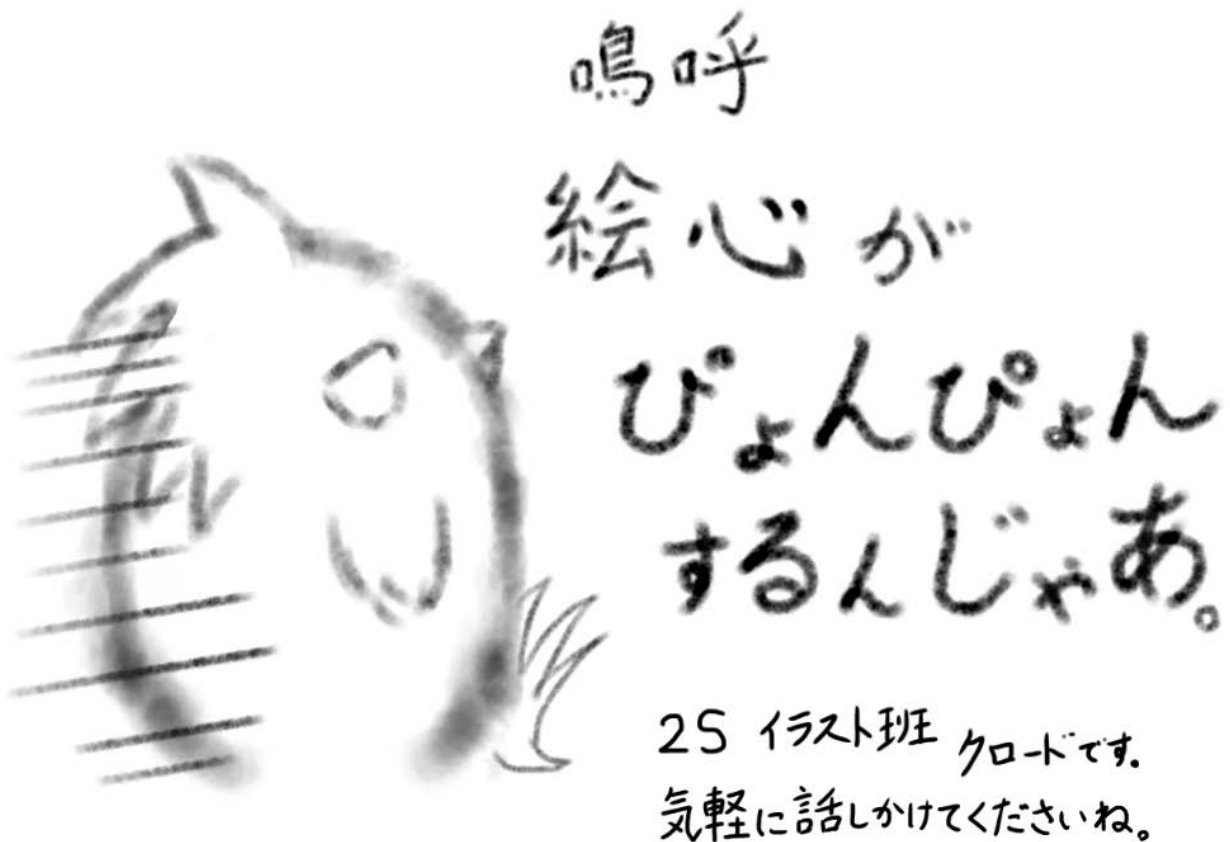
自己

紹介

Mooooo~



- ◆ ハンドルネーム 如月 吟
- ◆ 所属 文章班
- ◆ 詳細 2年電気工学科にいます。
とってもゆるい人（特に頭が、）です。
それでも良いという方は、よろしくお願ひします。



ただれん

いろいろしようと思って
何もしてない人
だいたい暇な人です

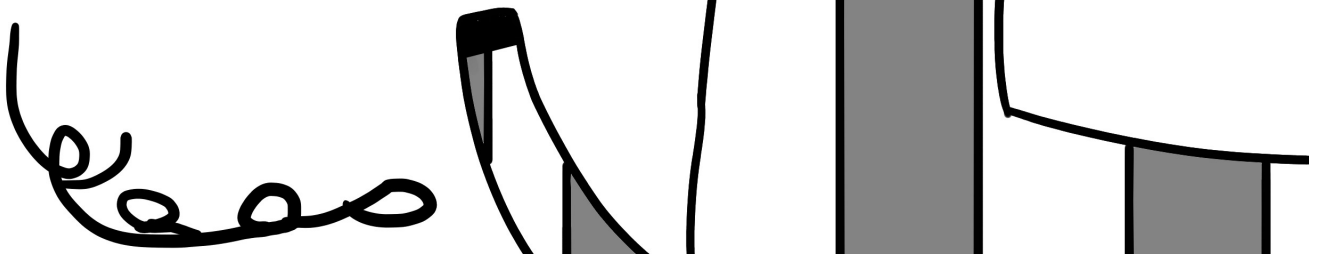


猫にゃん
2-Cの猫です!

イラスト班所属の猫にゃんです!
猫と呼んでください!

TCGとTRPG大好きな常識人です
だいたい部室にいるので
気軽に話しかけてくださいね♪

右のは私が考えたシマウマ型殺りく兵器です♥



ぶっちー

イラスト班で絵を描いたりしています

まだまだ練習中の未熟者ですが・・・

ただ、部室にはほとんどいないんですけどね

フランカー

こんにちは、フランカーです。役職は小説班です。

二人で始めた一年生最初のゲーム企画を遅れに遅らせ締め切りから半年たって完成させることに成功しました。

今回の会誌に載せさせていただいた文章はいかがでしたでしょうか、楽しんでいただければ幸いです。おそらくこの会誌を手にとったときには横に私が立っているはずなのでぜひお声をおかけください。

**現視研の眠れる獅子
(自称)のロゴで
す。**



起きることはありません。

若葉について

○学年と学科

2年情報工学科

○所属

文章班

○性格

興味のある話題だと饒舌になる。こらそこ！オタクとか言うんじゃない！

○どんな文章が好き？

ファンタジーとかオカルトとかが好きらしい。こらそこ！厨ニとか言っちゃダメだよ！

○最後に

気軽に話しかけると挙動が不審になるが、別に嫌なわけじゃないらしいので、じゃんじゃん声をかけてほしい

ちげ

どうも、3Eのちげです。

いつの間にか会長になってました。

でも全然えらくありません。

創作はいろいろやっています。イラスト、音楽、

動画、たまに小説も書いたりします。

最近はベジエ曲線にハマっています。ちなみに、

そこにいる人はベジエ曲線で書いてます。

あ、それと、マイクラ廃です。

気軽に話しかけてください。

その時は右耳に感覚を……ごめんなさい。



ふるつき

現視研のサイトを作っています。

もう完成しているはずです（予定では）

一年に一回ゲームを作って、

時折、文章を書いています。

ところで、JIS B列とISO B列では、
サイズが違うんですよ。

みのすけ

2→3年化学工学科

文章班

ミステリ小説を書こうと思って、トリックを思いつかず挫折する人です。

動物が好きです。

犬に関しても猫に関してもそうなのですが、耳ですね。耳が好きです。尻尾も好きです。触れたことは意外と少ないのですが、彼らの毛皮はとて面白い触り心地ですね。のんびりと柴犬でも撫でて、縁側で穏やかな老後を過ごしたいものですが、近年の情勢では厳しい、と心に影が差しています。

昆虫はダメです。奴らは恐らく宇宙から来たものだという説があるので、非常にミステリではありますがダメです。

<p>小刀というものです 電子制御工学科で 4年生やっています</p>	<p>現視研では主に 小説書いてます</p>
<p>小説を書くのに興味ある方 お気軽に話しかけて下さい それ以外でも大歓迎です</p>	<p>出来る限り何でも答えます (出来るかは不明)</p>
<p>書くネタが思い浮かばず こんな枠になりました (小型な小刀)</p>	<p>というわけで(どういうわけで?) よろしくお願ひします</p>

45黒板のこれまでの活動
1年: 部室に行, た
2: 行かなくな, た
3: 美術部に行, てた
今年は活重カする

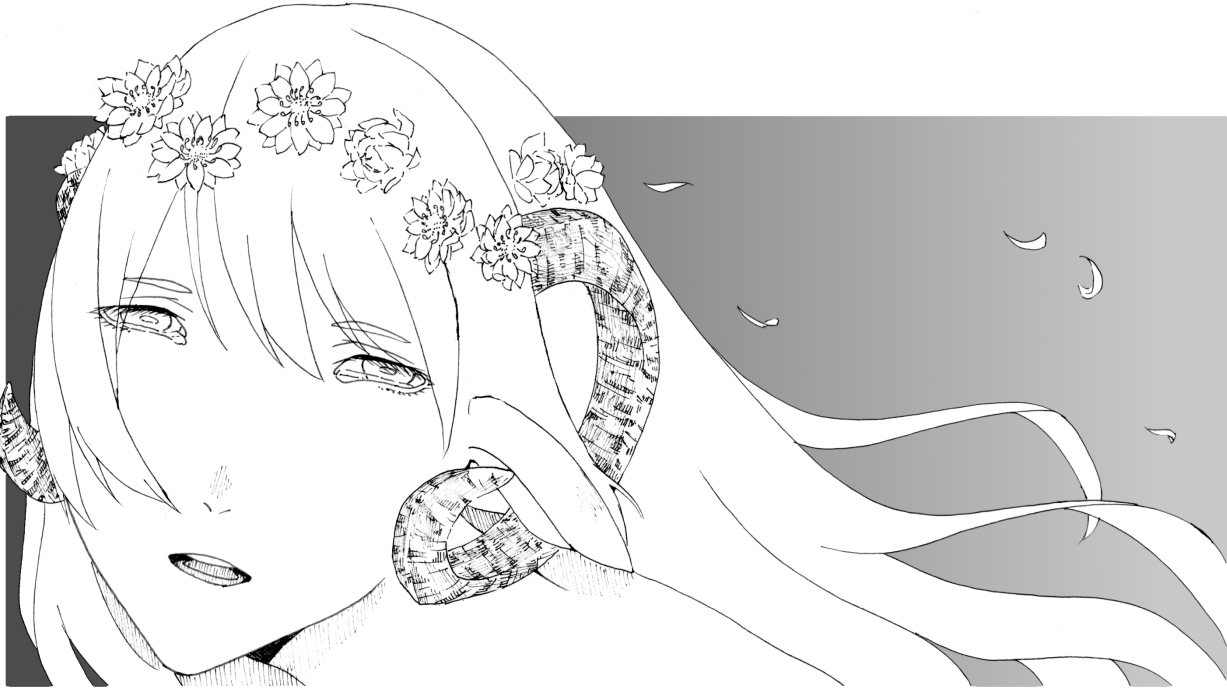


C/C++/C#
PYTHON/PHP/JAVASCRIPT
LINUX/NETWORKING/DATABASE

РАЗРАБОТЧИК
МОФУМОФУ
EXPORTSRF/POSEIDON 2

俺が
ぶっくろの
影霊夜だ

ツリウムはねむっている！



怠惰で快樂に従順な生物、平たくいわば駄目な奴をやっております、箱庭氏です。好物は猫と蛇と角と骨、後数学ねたと長髪、理想の人妻は雨月物語の宮木さんですが菊花の約や青頭巾なんかも好きなマイノリティの塊です。

font:XANO明朝

wolf

- ・ 電子制御工学科4年のひとです
- ・ 編集長です
- ・ えらくはないです
- ・ ~~猫~~とか~~蛇~~が好きです
- ・ よく部室にいるので気になったことがあれば何でも

あとがき

どうも、編集の wolf です。

ここまで現視研春会誌 Alchemy を読んでいただきありがとうございます。楽しんでいただけただでしょうか？

文章を書くのは苦手なのであとがきはここまでです。

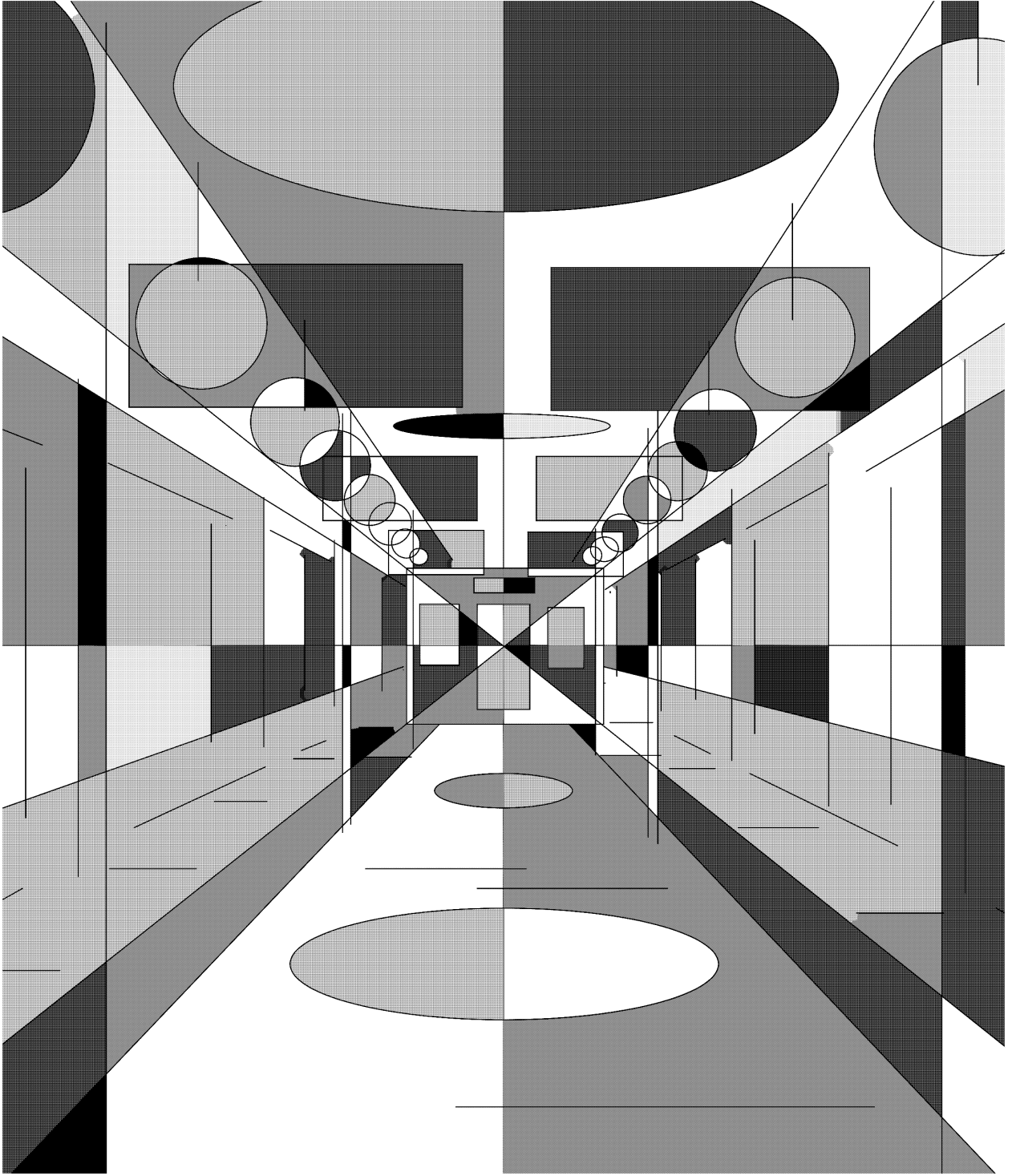
4年5科 高田一紀 (wolf)

現視研はかなりのんびりとした部活です。運動とかしたくないけどどこの部活にも入らないのはちょっとなーっていう人！ やらなきゃいけない事いっぱいなのはヤダーって人！ イラストを描きたい、小説を書きたい人、音楽を作りたい人、ゲームを作りたい人、TRPGしたい人、こころぴよんぴよんする人、腐女子、腐男子、決闘者、音ゲーマー、プロデューサー、シューター、DTMer、MMDer、ちょっとオタクっぽい人、重度のオタク、中学2年生の頃自分の脳内設定を書き綴ったノートを作ったことがある人……などなど、どれかに当てはまった人、もしくは当てはまらなかった人もゲームしに来るだけでもいいので、ぜひ体験にきてください！なんでもしますから！（なんでもするとは言っていない）

ツイ廃の人、Twitterしてる人のために奈良高専現視研（公式）Twitter アカウント置いときますね



奈良高専現視研 (@nnct_mvc3)



表紙・裏表紙 / ちげ